98-273
1200501341371
98
273
M

3Q-23

98-278

與謝野晶子作

おとぎばなし少年少女

博文館藏版

南海
43.9.30
四交

はしがき

自分の二人の男の兒と二人の女の兒とが大きく成ッて行くに從ッて、何かお伽噺が要るやうに成ッて參りました。それで、初の内は世間に新しく出來たお伽噺の本を買ッて讀んで聞かせるやうに致して居りましたが、それらのお伽噺には、仇打とか、泥坊とか、金錢に關した事とかを書いた物が混ッてゐたり、又言葉づかひが野卑であッたり、又あまりに教訓がかッた事を露骨に書いたりしてあッて、兒供をのんびりと清く素直に育てよう、潤く大きく樂天的に育てようと考へてゐる私の心持に合はない

ものが多い所から、近年は出來るだけ自分でお伽噺を作つて話して聞かせる事に致して居ります。その中から三十種ぢかくを擇んで印刷しましたのが此お伽噺です。印刷しますに就いては假名遣は在來のお伽噺の例に據らずに、一切只今の文部省假名を用ゐました。假名遣をむつかしい物の樣に言ふのは記憶力の鈍い大人の心持から申すことで、兒供の頭腦には水の流れる樣に樂に這入ッて行くものであると、私は我兒に對する實驗の上から信じて居ります。

明治四十三年九月、

與謝野晶子。

目次

一、金ちやん螢……一
一、女の大將……一二
一、燕どこへ行た……二四
一、鶯の先生……三四
一、金魚のお使……四八
一、お化け兎……六一
一、蟲の病院……七三
一、お留守番……八九
一、山遊び……一〇一

一、ニコライと文ちゃん……一一三
一、蟲の音樂會……一二五
一、螢のお見舞……一三六
一、紅葉の子供……一四七
一、芳子の齲齒……一五九
一、伯母さんの襟卷……一六八
一、蛙の舟……一八〇
一、美代子と文ちゃんの歌……一九一
一、贈りもの……二〇三
一、ほととぎす笛……二一八
一、こけ子と、こッ子……二三〇

一、文ちんの朝鮮行……二三九
一、衣裳持の鈴子さん……二四一
一、うなぎ婆さん……二六四
一、三匹の犬の日記……二七八
一、赤い花……二八八
一、鬼の子供……二九八
一、早口……三〇八

『松本さんのお孃樣は、女の大將ださうです。』
『知つてますよ、いんいんの大將だつてね。』
『いんいん女の大將つていふんだつて。』
と、もう誰知らぬものはない位になりました。外國へまでも此の噂がきこえたと見えまして、ある西洋の國から、その國の中將で日本へ來て居る人の處へ、
『日本に、いんいん女の大將といふ人があるさうだから、その人のことを調べてくれ。』
といつて來ました。中將がある人に聞きますと、いかにも松本大佐の家には、いんいん女の大將といふ人が居る。その人は戰に出て、敵を一人も殺さずに勝つ法を知つて居ると、話して聞かせま

した。その中將は感心して、その事を本國の方へいつてやりました。本國の方からは、そのえらい大將に自分の國へ來て貰へないだらうか、そしてその戰の仕方を自分の國の兵に敎へて貰ひたい、是非來て頂きたいといつて來ました。中將は早速靜子さんの家へ行きました。

『大將閣下はゐられますか。』

『旦那樣はお留守ですが、旦那樣は大佐でいらつしやいます。』

『さうぢやない、いんいんの大將にお目に懸りたい。』

『お孃樣ですか、さうですか、それならおいでです。』

といつて、下女は靜子さんに西洋人のお客樣があることを話しました。中將が座敷へ通りますと、可愛らしい女の子が、下髮にリ

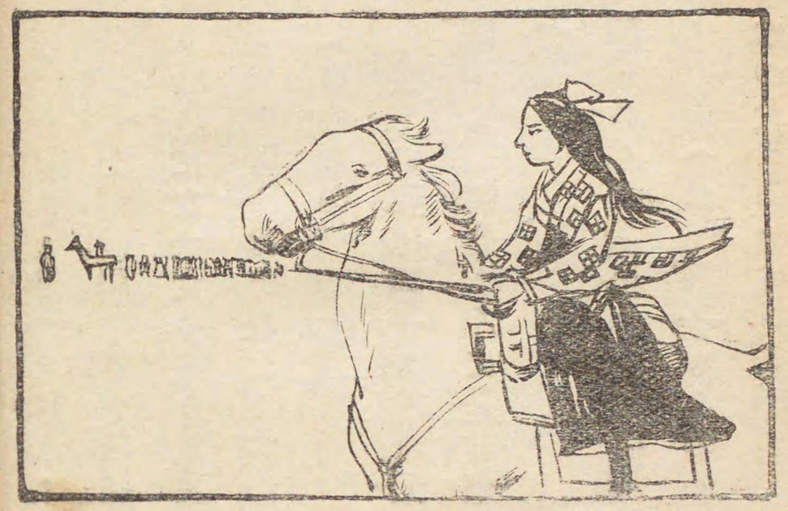
ボンを結んで座つて居ました。しかし大將はこれに違ひないと思ひまして、敷居の外で敬禮をいたしました。靜子さんは自分はえらい人になつたやうな氣になりました。

『大將閣下はあなたですか。』

『さうなの。』

と美しい聲で靜子さんは云ひました。中將はそれから、自分の本國から、靜子さんに是非來てほしいといつて來たことを話しました。

靜子さんが伯母さんに御相談をしますと、さういふことがあつたら、かへつて靜子さんのいんいんがなほるかも知れぬとお思ひになつたものですから、



『一寸だけ行つていらつしやい。』と仰しやいました。靜子さんは大よろこびで中將に連れられて西洋へまゐりました。

その國の港へ着きますと、見物人が山のやうにゐました。

『えらいものですね、十位ですがね。』

『フランスのジャンヌダルクのやうな人なんでせうね。』

などといつて居ます。その國の王樣

は靜子さんの爲に觀兵式をおもよほしになりました。その日に靜子さんに戰の仕方を少しでも見せてくれとのことでした。靜子さんは日本の青山練兵場のやうな場所で澤山の兵が竝んで居る前へ、中將と一緒にまゐりました。

『今、日本のいんいん大將が、戰の仕方をお見せになるから、諸君は謹んで拜見なさい。』

と王樣は仰しやいました。靜子さんは先刻から、何だか恐くて恐くてしやうがなかつたのですが、この時自然と、

『ひひい、いん、いん、いん。』

と泣き出しました。その國の兵は皆この聲に驚きまして逃げました。王樣も急いで宮へお歸りになりました。中將も堪へかねて走

り出しました。靜子さんは心細いものですから、なほなほ、
『ひひい、いん、いん、いん。』
と泣きました。しまひには練兵場に人が一人も居なくなりました。
『ひひい、いん、いん、いん。』
といふ聲はなほ續いて聞えてゐました。その翌日、王樣からお使
が來て、
『戰爭の仕方は分つた、お禮にこれを上げませう。』
といつて大きな箱を一つ下さいました。靜子さんは大喜びでそれ
を持つて日本へ歸つて來ました。
『伯母さん只今。』
と大きな箱を横に置いて、靜子さんは御挨拶をなさいました。

『お歸りなさい、その箱は何です。』
『王樣に頂いて來たのです。勳章でせう、きつと。』
『さうぢやないかも知れないね。』
『開けて見ませうか。』
と云つて蓋を明けますと、中にはでんでん太鼓やら、おしやぶり
やら、護謨でこしらへた乳首やらが一杯入つて居ました。
『それ御覽なさい、貴女があんまり泣くものですから、西洋の王
樣までが赤ん坊だとお思ひになつたのです。十にもなつてはづ
かしいぢやありませんか。』
と伯母さんはお云ひになりました。それから靜子さんはもう、
『ひひい、いん、いん、いん。』

と泣くことはなくなりました。

燕はどこへ行つた

富子さんのお家の玄關の軒の巣の中には、燕の父様と母様と、それから子供の燕が三羽居ました。その子供は喜いちやんつばめ、幸ちやんつばめ、ふうちやんつばめといふ名でした。三羽の中でも喜いちやんと幸ちやんとはおとなしくて、父様や母様のいふことをよくきくのですが、ふうちやんつばめだけはさうではないのです。一人歩きはあぶないとたびたび云はれるのですが、ふうちやんつばめは何時も親燕や兄弟の燕と一町も二町もはなれて飛びたがるのです。

『母様はお前だけが眞實に心配なのだよ。お前のやうなことをしてゐると、自分の巣のある所を忘れてしまふからね。母様の傍へ歸ることが出來ないで、他所の燕の巣へ食客に行つたり、外の鳥の所へ女中奉公しなければならないやうになりますよ、さうして終ひには鳥の乞食になるのです。厭なこととは思ひませんか。』

さう母様燕がいつて聞かせます時には、

『もう母様に心配はかけません。お利口な燕になります。』

といつて居るのですが、直ぐふうちやん燕は忘れてしまふのです。

富子さんがお琴の稽古から歸つて來ますと、

『お嬢様、おかへり遊ばせ。』

と御挨拶をしながら、母様つばめは悲しさうな顔をして居ます。

『つばめさん、どうしたのです。』

『日が暮れさうですのに、ふうちやん燕が歸つてまゐりません。』

『それは心配でせうね。』

『はい。』

富子さんは、目に涙を溜めて居る燕が氣の毒でならないものですから、

『それぢや燕さん、ふうちやん燕を捜しに行つてはどうです。私も一緒に行つて上げますわ。』

といひました。燕は大層よろこびました。

富子さんは自分の母様にさう申し上げて、それから母様つばめと一緒に出掛けました。

『お隣の春子さんのお家のお庭は廣いから、ふうちやんつばめは彼處で遊んで居るのかも知れませんよ。』

『さうですね、よくふうちやん燕はお隣へ行きます。』

お隣へ行きますと、丁度春子さんはお庭へ出て遊んで居ました。

『ふうちやん燕が歸らないものですから、母様燕と一緒に捜しに出て來たのです。』

『さうですか、それでは私も一緒に捜しに行きませう。』

と春子さんもいひました。皆でお庭を捜してますと、

『彼處に居ますわ、彼處に居ますわ、ふうちやん燕は水を飲んで居るのですよ。』

富子さんがかういつて駈け出しました。母様燕は大よろこびで、

『ふうちやん燕や、ふうちやん燕や。』

と言つて飛んで行きました。

『あら、ちがつた、燕ぢやなかつたのよ。』

『まちがひなの、富子さん。』

富子さんが燕かと思つたのは、池の傍に居た蛙でした。

『眞實にふうちやん燕はどうしたのでせう。』

母さん燕はまた心配な顏になりました。

『あら、彼處に居るぢやありませんか、燕さん。』

向うの方を見て、春子さんがかういひました。

『すこし羽の色が紫すぎるやうね。』

『それでもふうちやん燕らしいぢやありませんか。』

皆で傍へ寄つて見ますと、それは菖蒲の花でした。さうしますと母様つばめは急に悲しい聲を出して、

『お嬢様、お嬢様、ふうちやん燕は彼處で死んで居ります。水にはまつて死んで居ります。まあ悲しいこと、どういたしませう。』

といつて池の中を覗いて居ります。

『よく見ないと分らないぢやありませんか、ふうちやん燕だつてそんなに馬鹿ぢやないのですもの、水に落つこちて死ぬといふことはないでせうよ。』

富子さんがなぐさめても、母様つばめは泣いてばかり居るものですから、富子さんは竹の棒を一本拾つて來まして、燕が自分の子

供の沈んで居るといふ處へ入れて見ましたが、何も浮いて來ませんん。

『燕さん、死骸なんか沈んで居ませんよ。』

『も少し底の方でございませう。そら其處にふうちゃん燕の死骸がありますの。』

『燕さん、あれなの、あれはふうちゃん燕ぢやありませんよ、あれは菖蒲の花の影が水にうつつて居るのですよ、ほほほ。』

『さうですわ、花の影ですわ、燕さん、ほほほ。』

富子さんと春子さんが笑ふものですから、

『まあ、まちがひで結構でした。ほほほ。』

と母様燕も一緒になつて笑ひました。

『おや、彼處に居りさうですよ。』

母様燕は木の蔭から出まして、縁側に立つて居る小間使に、

『女中さん、女中さん、其處の石の上に居るのは燕の子ぢやありませんか。』

と聞きました。さうしたら

『これですか、これは燕の子ぢやありませんよ、お嬢様のお靴ですよ。』

と小間使がいひましたので、母様燕はまたすごすごと富子さんの立つて居る處へ歸つて來ました。

『まちがひだつたの。』

『はい。』

『あの藤の花を出たり入つたりして居るのは燕らしいから、私が呼んで來て上げませう。』

春子さんは藤の花の下へ行きまして、

『ふうちやん燕、母様が心配してゐますから、早く巣へお歸りなさい。』

といひました。さうすると、

『ちゆう、ちゆう、ちゆう、ちゆう。』

と啼いて藤の花の中を分けて出て來たのは雀でした。

『あら雀だつたわ、あなたぢやなかつたのよ。失禮。』

春子さんは顔を少し赤くしてかう云ひました。

それからもう此のお庭には居ないだらうと、皆で相談をして、今

おとぎばなし 少年少女

金ちやん螢

與謝野晶子作

むかしむかし、螢と云ふ蟲がありました。螢は頭の處が一寸赤いだけで、あとは唯まつ黑な蟲ですから、子供たちは、

『厭な蟲だね、こほろぎのやうにころころとも啼かないし、きりぎりすのやうに、ぎいつちよんとも啼かないし、松蟲や鈴蟲のやうないい聲は出ないでも、がちやがちやとくつわ蟲の聲でも

出るといいのだが、さうもいかないし、すいつちよのやうな涼しい聲も出ないし、眞實にお前は困つた蟲だ。さうかと云つて蝶蝶や玉蟲のやうに美くしくはなし、眞實にお前は困つた蟲だ。』と云つて靴や草履で踏み殺してしまひます。螢はもう困つてしまひまして、

『こんなことぢや、今に私達の友人は皆なくなつてしまうだらう。どうか工夫がないだらうか。』

さうしますと、その中に金ちやん螢と云ふお利口な螢がありまして、

『誰れか神樣にお願ひに行つたら、きつとどうか工夫をして下さるでせう。』

『さうだ、さうだ、それがいい。ぢやあ金ちやん螢に願はう。』

『金ちやん螢行つて下さいな。』

『それぢやあ、僕一人では寂しいから三ちやん螢と一緒に行きませう。』

二つの螢は直ぐ飛んで行きました。神樣のお部屋の窓のところへまゐりますと、

『お前は何と云ふ蟲なの。』

とやさしく問うて下さいました。

『神樣、私は螢でございますが、私にどうかいい聲を下さいませんでせうか。』

『それを賴みに來たの。よし、よし、それではね、聲よりもいい

ものを上げやう。そちら向いて御覽。』

と仰つしやつて、神様は燐寸を、しゆつとおすりになつたと思ふと、懷から鏡をお出しになつて、

『さあ見て御覽。』

と仰つしやいました。金ちやん螢は見るとおどろきました。綺麗に綺麗に自分の身體が光つて居るのですもの、あんまりうれしくつて涙がこぼれました。

『神様、ありがたう御座いました。』

『それでは、この棒を上るから、これを持つて、よい、よい、よいとお前が三つ振ると外の螢もみんな火がつきます。其處に居る小さいお友だちにもつけてお上げ、よい、よい、よいと三つ

云ふのですよ。』

金ちやん螢は棒を貰ひまして、三ちやん螢の方を向いて、

『よい、よい、よい。』

と云ひました。さうすると三ちやん螢も金ちやん螢とおなじやうに綺麗な火がつきました。二人で、

『さやうなら。』

と御挨拶してお窓を出ました。

螢のお家の方では、もう歸つて來さうなものだと皆が空を眺めて待つて居ます。

『おや、何だらう、星さんが落つこつて來たやうだ。』

『さうぢやないでせう、お月さんの坊つちやんが遊びにいらつし

たのでせう。』

『あら、金ちやん螢の聲がする。』

『あれは金ちやん螢が夜分だからつて、提灯を神樣に拜借して歸つてくるのでせう。』

『提灯よりはあかるいぢやありませんか。らんぷでせう。』

『電氣燈でせうよ。』

と云つて居るうちに、だんだん近くなつたやうですから、

『金ちやん螢、何を貰つて來たの。』

と誰かが聲をかけました。

『いいもの、いいもの。』

『光つて居るのはダイヤモンドですか。』

『いいえ。』

『さあべるですか。』

『そんな人を切るやうなものぢやありませんよ。』

『まるいおまんぢうですか。』

『ちがひますよ。』

さう云ひ云ひ歸つて來ました。綺麗なものですから皆が驚きまして、

『綺麗ね、よく見せて頂戴。』

『あちら向いて見せて下さい。』

『何てい綺麗だらう。』

『きれいね。』

『立派だ、まあ。』

金ちやん螢は棒を出しまして、

『さあ皆にもつけて上げませう。』

と云ひました。

『うれしいなあ。』

『さあ、よい、よい、よい。』

さうしますと皆の螢が一度に火がついたものですから、その綺麗なことと云へば、大きな花火がぱつと出てそして少しも消えずに居るやうなものです。

『君きれいだよ。』

『君もだよ。』

と云つて皆でよろこんで居ます中に、文ちやん螢は一人めそめそと泣いて居ます。

『文ちやん螢、どうしたの。』

『僕は、僕は、あ、あ、あ。』

『何泣いて居るの。』

『皆綺麗だけれど僕だけはきれいぢやない。』

『なぜ。』

『火がつかないもの。』

『何を云つてるのですよ、後だから自分では見えないのですよ。

さあこの川の水でうつして御覽。』

その通りにしますと、文ちやんは驚きまして、

『ああ、綺麗、綺麗、綺麗だなあ。うれしいなあ。』

と云ひました。それから後小供達はもう靴や草履で踏むやうなことはしなくなりました。皆太切に籠へ入れて持つて歸つて來ます。

ところが金ちやん螢はかう云ふ手紙をよこしました。

皆さん御無事ですか、私は一昨晩光坊つちやんの籠へいれられて、坊つちやんのおうちへまゐりました。坊つちやんはいい坊つちやんです。弟の茂ぼつちやんもなかなかいい坊つちやんです。二人の坊つちやんは、私に草を入れて下すつたり、水を吹いて下すつたりなさいます。そして、

私のほたるは、いいほたる。

きれいな、きれいな、螢さん。

お前は誰の坊つちやんだ。

夕方黄いろい明星は、

私の螢の母さんだ。

夜あけに白い明星は、

私の螢の父さんだ。

と、かう云ふ歌もうたつて下さいます。皆さんも夕方からお遊びにいらつしやいな、まつて居ます。さよなら。

『どうだ、みんなで光さんのおうちへ行かうぢやないか。』

と一人が云ひますと、

『行かう、行かう。』

と皆がさんせいしました。その晩光さんは茂さんと一緒に、金ち

やん螢に水を吹いてやつて居ますと、そこへ大きな螢が來ました。

『兄さん、螢のお友だち。』

『おや、また來た、また來た。』

『あつちからも兄さん三つ來ましたよ。』

『澤山くる、澤山くる。』

あんまり澤山の螢が遊びに來ましたので、光さんはうれしくてうれしくて仕樣がありませんでした。

女の大將

靜子さんの兄さんは、靜子さんのことを女の大將と仰しやいます。何故靜子さんは女の大將なのでせう。それはかういふ理由です。

十歲になる靜子さんは、外のことは賢い子なのですが、泣き初めると實によく泣く子なのです。その又泣聲が、

『ひひい、いん、いん、いん。』

と、ひびくやうな泣聲で、伯母樣や、兄樣や、姉樣でさへ、

『ああ、厭だこと、厭だこと。』

とお思ひになるほどの聲です。

『お孃樣のお泣聲を聞きますと、私は病氣になりさうですから、お暇をいただきたうございます。』

といふ下女もあるほどです。

この靜子さんの兄樣は、松本大佐といふ陸軍の方なんです。

『この次に何處かの國と戰爭が初まつたら、靜子が戰爭に出て、

ひひい、いん、いん、いんと泣くと好い。さうすると大抵の敵はあゝ厭だ、厭だといつて逃げてしまうだらうから。』

『羞しいこと、いんいんの大将だね。』

と伯母さんが仰しやいました。

『さうです、女の大将です、いんいん女の大将といふのです。』

『女の大将といふだけで好いわ。』

と靜子さんはいひました。平常はこんな元氣の好い子なんですが、一寸したことから、

『ひひい、いん、いん、いん。』

が初まるのです。近所の人もこれが初まりますと、

『松本さんの内で、いんいんが初まつたから戸を閉めませう。』

といつて、眉をひそめるのです。靜子さんの内の下女が、ある時隣へまゐりまして、

『お内儀さん、内のお嬢様は大將様におなりになるのださうです。』

といひました。

『へへえ、女の大將ですか。』

『さうださうですよ、この次の戰爭にはお出になるのださうですよ。』

『兄様が軍人だと、女でも大將になれるものかね。』

『なんでも内のお嬢様がお出になると、きつと敵は逃げるつて旦那様が仰しやいました。』

『どういふ軍人なんですかね。』
『いんいんの大將とかいふことですよ。』
隣の人は手をはたとうちまして、
『はあ、分りました、分りました。』
『お内儀さんは戰のことが分るのですか、いんいんの大將つてどんなお役ですか。』
『それはきつとかうです、戰爭の時にあのお孃樣を出して、ひひい、いん、いんと泣かせるのですよ、さうすると敵はみな逃げてしまうだらうつて云ふんですよ。』
『さうに違ひありません、お内儀さん。』
と下女はうなづきました。その噂がそれからそれへ傳はつて、

度は町へ出て搜すことにしました。門を出て二町ほど來ますと、母樣つばめは血相を變へて大きな乾物屋の店へ入つて行きました。富子さんと春子さんが、後からついて乾物屋の店の前へ來ますと、燕はしきりに其の家の小僧さんと談判をして居ります。
『何故私の子供をお殺しになつたのです。』
『何を先刻から云つて居るのだ、馬鹿燕奴。』
『ふうちやん燕はどんな惡いことをしたので殺されたのです。』
『ふうちやん燕だつて、燕の名なんか知るもんか。』
『まあ惡いことをして殺されたのなら燕のことだから仕方がありませんが、あんなにむごたらしく死骸を店へつり下げたりしなくてもいいではありませんか。』

小僧さんは立ち上りまして、

『燕さん、お前はこのことを云つて居るのだらう、これは飛魚の乾物だよ、よく見るが好い。』

といつて取つて來ましたのは、ふうちやん燕ではなくて、飛魚の乾物でした。

『あら失禮いたしました、御免なさい。』

と燕は乾物屋の店を急いで飛んで出ました。それから幼稚園へ遊びに行つたのかも知れないといつて、

『黑いやうな紫の著物を著て、白い胸當をしたふうちやん燕といふ子は居ませんか。』

と問ひに行きましたが、もう幼稚園には誰も生徒は居ませんでした。それからお家へ歸つて見ますと、ふうちやん燕は道にはぐれて居たといつて、友達の燕が送つて來て居ました。その日母樣燕の心配した話を、富子さんがいつて聞かせましたので、その後ふうちやん燕は大層おとなしくなりました。

鶯の先生

京都のまちに嘘つきおかねといふ婆さんがありました。もとより某といふ苗字があるのですが、人はみなおかねのことを嘘つきおかねといひました。おかねはうまれつき嘘をいふのが好きで、そして欲の深い女でありました。そんな女のことですから、もとより金持ではありません。おかねは五十位の女でしたが、子供は一

人もありませんでした。ところがある時、田舎の親類へ行つて、其處からおつるといふ女の子を一人、自分の子に貰つて來ました。田舎の親類は、おかねが京の町で悪い噂のあることなどは少しも知らずに、可愛い子をやつたのでした。このおつるといふ子はそれはそれは聲の美くしい子でした。昔の人が、盤の上を玉がまろぶ音とたとへたのは、かういふ聲の人であらうかと思はれるくらいです。よくないおかねは、このおつるの聲のよいのをもとにして、何かよい金まうけがないかと考へました。

東京でも隨分鶯を飼つて居る人がございますが、京都はこれがことに盛んでして、ある一部の人たちは、鶯の啼合會とか、鶯の品評會とか、鶯の番付とかいうては夢中になつて居ります。さうな

もんですから、鶯を飼ふといふことは、もう一ぱんのことになつて居るやうです。そして何處の鶯が今年は大關であるとか、彼處の鶯は前頭になつたから百圓の價が出たとか、羨しさうに噂をいたします。またよい鶯を持つて居る人の家へ、自分の鶯を稽古に通はせます。八瀬の山や、大原あたりで、今年とつて來た鶯を籠に入れて、鶯の先生のところへもつてまゐります。其處の家では、夜分でも鶯の啼くやうに、小さい洋燈を鶯の先生の籠の中へ入れます。さうしますと鶯の先生は谷渡りといふ啼方をして聞かせます。

『ホオホケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ホオホケキヨ。』

といふんです。

弟子の鶯は默つて其の時は聞いて居るのです。山の鶯自身は、

『ホオケキヨ、ホオケキヨ。』

だけしか歌へないんです。

その日家へつれて歸りますと、

『ホオケキヨ、ケキヨ、ケキヨ。』

位いふのです。あくる日はまた、

『ホオホケキヨ、ケキヨ、ケキヨ。』

と覺えます。それからまた、

『ホオホケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ホオホケキヨ。』

と、だんだんさういふやうに上手になつて行くのです。この鶯の

先生を飼つて居る家は、よろしいのになりますと、一回が一圓、それから五十錢位まであるのです。十羽も二十羽も鶯の弟子がまゐりましては、なかなかお金まうけになるのです。

嘘つきのおかねは、ふとこのことを考へまして、

『おつるや。』

『はい、何御用でございます。』

と、おとなしいお鶴はいつて出てまゐりました。

『お前、鶯の啼聲が出來るかい。』

『出來るでせう。』

『いつて見てごらん。』

『はい。』

とは云ひましたが、お鶴はきまりが悪くてそんなことは云はれません。

『早くさ。』

お鶴は母が恐さに、聲を張りあげて、

『ホオホケキヨ。』

といひました。おかねは横手をうちまして、

『うまい、うまい、も一度、ホオホケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ホオホケキヨ、といつてごらん。』

『はい。ホオホケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ホオホケキヨ。』

かういひましたお鶴の聲は鶯よりも美しうきこえました。

『よし、よし、もういい。いい。お母さんは一寸出掛けて來るよ。』

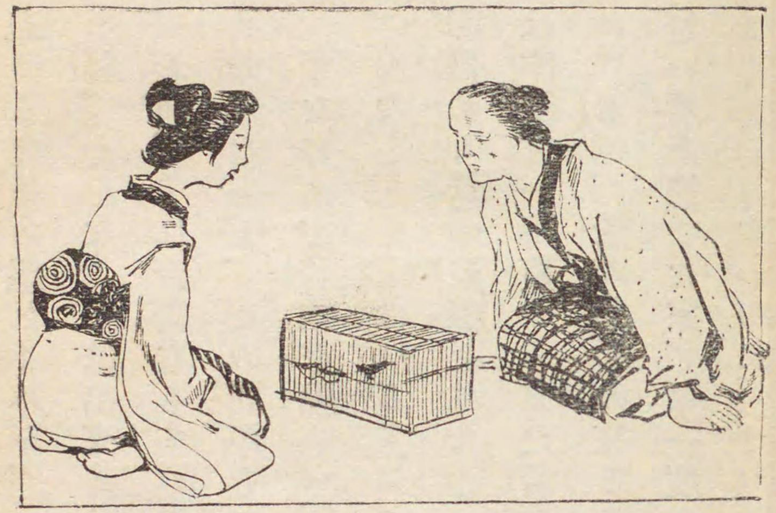
といつて、おかね婆さんは家を出て行きました。夕方になつて歸つて來たのを見ますと、背中に大きな風呂敷包みを背負つてゐました。何かと思ひますと、それには立派な鶯籠が五つ包んでありました。それから鶯も五羽居ました。

『お母さん、どうなさるの。』

『まあいい、見てお出よ。』

といひまして、手にさげて歸つた方の風呂敷包をあけますと、これには檜板の看板が入つて居りました。鶯教養所、一等より五等までの鶯の練習に應ず。と書いてございました。

『お母さん、この鶯が先生になるのですか。』
『馬鹿をおいひよ、先生になるやうな高い價の鶯を私が買へるものかね。これは五つで二十五錢だよ。』
『啼かないのですか。』
『啼いてたまるものかね、お前。』
『先生の鶯は何處からくるのです。』
『内に居るよ。』
『何處に。』
『お前のことさ。』
『えッ……。』
おつるは母のいふことがよく分りませんでしたが、だんだんおかねの話を聞いて見ますと、立派な籠に一つづつ此の鶯を入れておいて、これは一等とか、二等三等とかきめて置いて、鶯の弟子をとる時に、その飼主が鶯の聲をきかせてくれといふと、隣の間で聞いてくれといつて、おつるに鶯の啼く眞似をさせるのだといふのです。
『一等は一圓二十錢もとつてやるのだから、よほどうまくやらなけりやならないよ。』



おつるは母の惡だくみを聞いて、ぼんやりして居ました。

『私、そんなことは出來ません。』

『お前、それが厭ならすぐ出て行つておくれ。ただ出て行つてはいけないよ、この間から食べさせた食料を置いて行つておくれ。でなければ着物を脱いで、はだかで出てお行き。』

こんなことを云はれるものですから、十二のおつるは仕方なしに、明日から鶯の眞似をすることを承知いたしました。おかね婆さんは昨日書いて貰つて來た看板を門にかけて、あくる日は家をきれいにして、鶯の弟子の來るのをまつて居ました。何も知らぬ人は、好い鶯を持つた家では一度や二度賴んだ位では、なかなか稽古をさしてくれないのに、これは手輕で好いと、早速自分の鶯をつれ

てきました。

『一等になさいますか。』

『どの鳥が一等なんですか。』

『これですよ。』

『あまり姿はよろしくございませんね。』

『馬鹿々々しい、鶯は見るものぢやありませんよ。』

と、おかね婆さんは顏をふくらせました。

『一等の聲をきかせて貰ひたいものですね。』

『よろしい、まあ座敷へ通つてきいて下さい。』

といつて、おかね婆さんは隣の室で小聲で、

『いいかい、ケキョが五つだよ。』

おつるは悲しさうな顔をしながら、だまつてうなづいて居ます。

『ホオホケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ホオホケキヨ。』

『いかがです。』

おかね婆さんは隣の間を覗いて、かう云ひました。

『どうも好い聲だ、早速ねがひませう。』

『一圓二十錢。』

『けつかうです。』

といつて、客は金を拂つて歸りました。おかね婆さんは大よろこびで、

『おつるや、二等はケキヨが四つだよ。』

『三等は三つですか。』

『四等は二つさ。』

『五等は一つですね。』

先の客の噂を聞いた人たちは、彼方からも此方からも、鶯をもつて出てまゐりました。

『今年は二等にして置いて、來年は一等の稽古をさせませう。』とか、

『三等でよろしい。』とかいひます。

『三つだよ。』とか、

『四つだよ。』

とか、手眞似をしておかねはおつるにいひつけて居ました。然し

鶯は眞實の鳥についていてこそ覺えるのですが、こんなことではとても家へ歸つて歌へるものではありません。

まもなくおかね婆さんの惡だくみが知れまして、おかねは警察へつれて行かれました。

おつるは何も知らぬ可愛さうな子ですから、ある親切な人が、音樂學校へ入れてやりました。

金魚のお使

太郎さんは駿河臺の菊雄さんの所へ、お使をやらなければならない御用があるのですが、女中の梅やが御病氣なので、どうしたらいいだらうかと考へて居ました。さうすると弟の二郎さんが、

『兄さん、金魚をお使にやりませう。』

と云ひました。太郎さんは喜びまして、

『さうしませう、赤をやりませう。』

と云ひますと、

『僕の白も一緒にやりませう。それから千代ちやんの斑も一緒にやつていいでせう。』

二郎さんのかう云つた言葉に千代ちやんも贊成したものですから、三疋の金魚はいよいよお使に行くことになりました。

『電車に乘つて行くのだつたね、赤さん。』

『さうだよ、危いから氣を付けなくちやあ。』

『電車は恐いものだつてね、じつとつかまつてなくちやあ礫かれ

るのかしら。』

『さうぢやないだらう、乘る時が危いのだよ、それから降る時なんかね。』

赤は一番大きいものですから外の二疋にこんなことを云ひ云ひ甲武線の電車の新宿の停車場へ來ました。

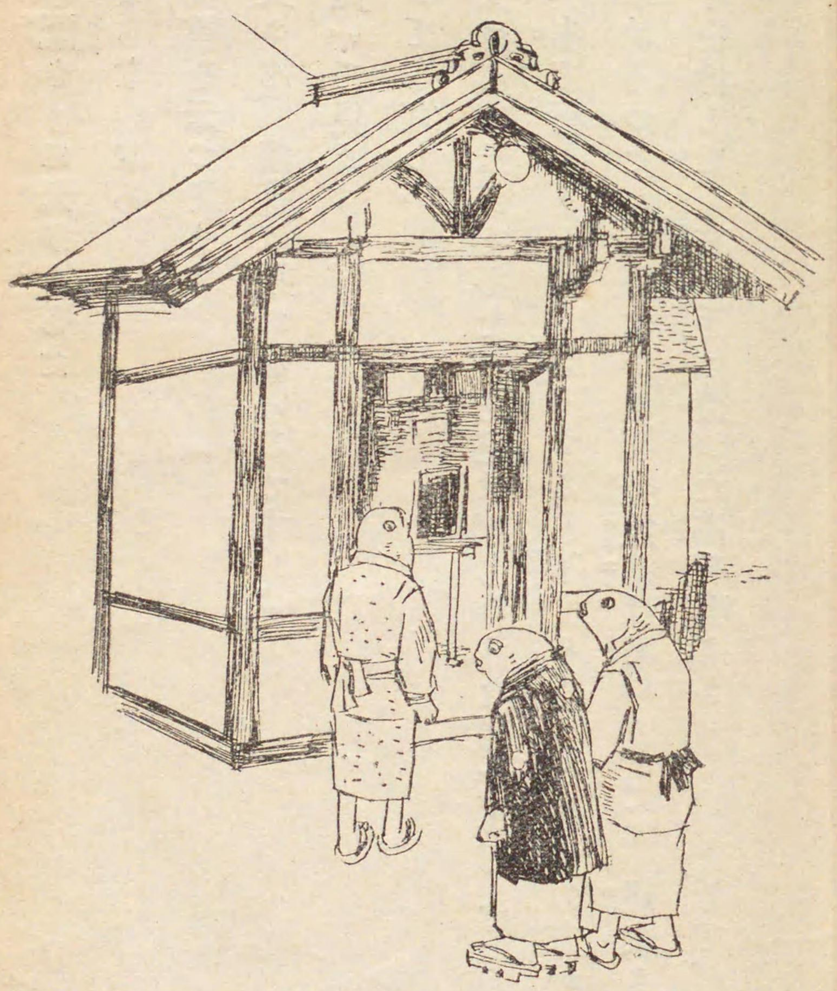
『切符を三枚下さい。』

出札口で赤が大きい聲で云ひますと、

『貴君は金魚さんぢやありませんか、金魚さんに切符は上げられません、お手がないから。』

と驛夫は云ひました。

『赤さん、乘れないのかい。』



白は心配さうに云ひました。

『つまらないなあ。』

斑は獨言を云つてます。

『驛夫さん、僕等は乘れないのですか。』

赤が聞いて見ますと、

『乘つても宜しい。』

と驛夫さんは云ひました。三疋は嬉しさうな顏をしてぷらつとほ、おむへ出て行きました。さうすると丁度そこへ大久保の方から來た電車があつたものですから、金魚達は乘りました。驛夫さんが左の手を伸して、右の手で持つた笛を鳴らさうとしまして、

『ぴい。』

と吹きかけますと、三疋の金魚は大變周章てまして、

『車掌さん、車掌さん、一寸待つて下さい。』

『待つて下さい、驛夫さん、驛夫さん。』

『驛長さん、驛長さん。』

車掌さんも、驛夫さんも、驛長さんも何事が起つたのかと思つて金魚の傍へ走つて來ました。

『どうしたのです、どうしたのです。』

『怪我でもしたのですか、金魚さん。』

車掌さんと驛夫さんがかう云ひますと、

『水を入れて下さい、はやく水を入れて下さい。』

と金魚は聲を揃へて云ひました。

『水を何處へ入れるのですか。』
『電車へ水を入れて下さい。』
『電車へですか。』
『さうです。早く願ひます。』
金魚がさう云ふのを聞いて、車掌さんは首を振りまして、
『電車へ水は入れられません、そんなことをするとお客樣の下駄や靴が濡れますから。』
と云ひました。
『それでも水を入れて貰はないと僕達は死ぬぢやありませんか。』
赤がかう云ひますと、白と斑は、
『苦しいなあ。』

『ああ苦しい、水がなくちやあたまらない。』
こんなことを云つてました。車掌さんも驛夫さんもそれが氣の毒なものですから、いろいろと考へて見ました。
『それではかうしやうぢやありませんか、驛長さんの所にある金盥を拜借して、あれに水を入れて來て上げます。』
驛夫さんはかう云つて彼方へ行きましたが、暫くしますと大きな金盥に水を澤山入れて持つて來ました。
『金魚さん、さあ此處へ入つて入つしやい。』
『ありがたう、驛夫さん。』
『ありがたう。』
『どうもありがたう。』

ちやぶん、ちやぶん、ちやぶんと三疋は金盥の中へ飛び込みました。驛夫さんは、

『ぴり、ぴりぴりぴり、ぴりつ。』

と笛を吹きました。電車は新宿を出て、それから代々木だの千駄ケ谷だの信濃町だのを通りまして、四谷のもとの學習院の下のとんねるへ入りました。急に電氣燈がつきましてそこらが暗くなつたものですから、白と斑は夜分になつたのだと思ひまして、

『ぐう、ぐう、ぐうぐう。』

と鼾をかいて寢てしまひました。とんねるを出てもまだなかなか目を覺しさうでないものですから、赤は外の人に耻しいと思ひまして、

『白君、白君、おい斑さん、もうお起きよ。』

と云ひました。白と斑は一度に目を覺しまして、

『おや、もう夜が明けたのかい。』

『坊つちやんお早う。』

寢呆けてこんなことを云つてます。

『君、此處はお家の池ぢやないよ、電車なんだよ、先刻暗くなつたのは夜分になつたのぢやなくて、あれはね、とんねると云つて土の中に電車の道が出來て居る所なんだよ。』

と赤が教へてやつたものですから、

『さうかねえ。』

『そんなことちつとも知らなかつた。』

と云つて二疋はうなづいてました。それからだんだんと、市ケ谷だの牛込だの飯田町だの水道橋などを通つて電車はお茶の水の停車場へつきました。

『赤さん、彼處で人が身體を半分水へつけて何かをとつて居るが、あれは何なのだらう。』

白がかう云ひますと、

『あれはね、僕達の御馳走のぼうふらをとつて居るのですよ、金魚屋のお爺さんがよくくれたね、あれだよ、此の邊でとるのと見えるね。』

と赤は云ひました。

『景色の好い處だねえ。』

斑はかう云ひました。

『またいつか坊つちやんにお願ひして此處らへんへ遠足によこして貰はうぢやないか。』

白が云ひますと、

『その時はお辨當はいらないねえ、ぼうふらが居るから。』

と赤が云ひました。三疋はぷらつとほおむでこんな話をしてましたが、今車掌さんに持つて降して貰つた金盥を、お茶の水の驛夫さんにあづけて、駿河臺の鈴木町の菊雄さんのお家へお使ひに行きました。赤が太郎さんから聞いて來た御用を云ひますと、

『それは御苦勞さま、母樣えらい金魚さんですね、三疋で電車に乘つてお使ひに來たのですよ。』

菊雄さんは母様にかう云ひました。

『それはえらいのね、御褒美を上げませう。』

母様は三疋の金魚に燒麩だの索麵だのを紙へ包んで下さいました。けれど、金魚は手が無いものですからおあづけして歸らうとしました。

『それではあとから小包郵便で送つて上げませう。』

『ありがたう、さよなら。』

白と斑はだまつてお辭儀だけをして居ました。三疋はまたお茶の水の停車場へ來て、其處から金盥に入つてまた電車へ載せて貰ひました。今度は誰もとんねるで眠つたりせずに新宿へ着きました。

さうすると太郎さんと二郎さんと千代ちやんは停車場へ小さいば

けつを一つづつ持つて金魚をお迎ひに來て居ました。

お化うさぎ

ある日の夕方、太郎さんがお座敷に居て、お庭の方を眺めて居ますと、向うの築山のかげに白いものが見えます。

『何だらう、梅や見て御らん、お庭に白いものがあるよ。』

『おや、タオルが飛んで行つたので御座いませうか。』

『さうぢやないよ、動いてるもの。』

『ほんとにさうですね。』

『何だか歩いてくるやうだ。』

太郎さんがさう云ふものですから、梅も縁側へ出てじつと見て居

ます。

『犬でせうか。坊つちやん。ポチ、ポチ、ポチ、ポチ。』

『犬なら走つてくるねえ、梅。』

『さうですね。』

梅も首を傾けて考へました。

『坊つちやん、兎のやうです。』

『さうね、だけれど少し變だね。』

さう云ふうちに、その白いものはだんだんと近くへ參ります。

『坊つちやん、兎ですけれど變な兎ですね、尻尾がね、坊つちやん、長いぢやありませんか。』

『お腹もあんまり大きいね。』

『顔も狸のやうですね。』

『狸が兎に化けて來たのだ、きつと。』

『さうでせう、きつと。』

『面白いね、花子ちやん入らつしやい、早く早く。』

『なあに。』

と云つて、其處へ花子ちやんも走つて來ました。白いお化の兎も縁側の傍までまゐりました。

『今日は。』
『君は兎かい。』
『さうです。』
太郎さんは自分の方からいろいろのことを云つて見て、この化兎に『私は狸でありながら兎になんか化けまして悪う御座いました』と云はせようと思ひました。
『君は耳だけが長いけれど、少し兎とは違つて居る。』
『何處がですか、坊つちやん。』
『白い兎の目はたいてい赤いぢやないか。』
『おや、さうですか。』
狸のぐるぐる目がついて居た兎は、太郎さんの言葉を聞いて直ぐ

赤い目になりました。
『さうだ、さうだ、それで好いよ。けれどまだをかしい。』
『坊つちやん、今度は何です。』
『尻尾がそれぢやあ。』
『おや。』
と云ひました兎は、後を振向いて見まして、太い黒い尾のついて居るのに自分も驚いて、直ぐ小い白い尾にしました。
『それなら君は兎だ、けれど後足の方が少し長くなくちやあ。』
太郎さんがさう云ひますと、
『かうですか、坊つちやん。』
と云つて、狸の化けた兎は、急に後足を長くしましたこと、長く

しましたこと。

『それぢやあんまり長いなあ。』

『この位。』

『前足の方を少しみじかくした方がいいでせう。』

『はい、はい。』

兎は前足を胴から一寸ほどにしてしまひました。

『それから兎は皆三つ口のものだ。』

『何ですか。』

『三つ口だよ。』

『ははあん。』

太郎さんも、花子さんも、梅も驚きました。狸が眞實に口を三つ

こしらへたのですもの。狸は太郎さんの言葉がよく分らずに、三つ口と云ふのは口が三つあることだと思つたのでせう。

『あらいやなこと、およしなさいよ、およしなさいよ。』

と梅は云ひます。太郎さんと花子さんは大笑ひをして居ました。

狸は周章てまして口を四つにしたり、五つにしたりして居ます。をかしくてをかしくてなりません。

『三つ口と云ふのはね、上の唇が三つになつて居ると云ふことですよ。』

と花子さんは教へてやりました。それから太郎さんは、

『兎は腹皷を打つものだ。』

と、こんなことを云つて見ました。

『兎も打ちますか。』

狸の兎は不思議さうな顔をして居ます。

『打つとも打つとも、早くお打ちなさいよ。』

と梅が云ひました。狸の兎は石の上に坐りまして、自分の自慢にする腹皷を打たうとしましたが、急に困つた顔をしました。

『坊つちやん。』

『なあに。』

『こんな短い手ぢやあ。』

狸は兎だと見て貰ひたい爲めに短くした前足をじつと眺めて居ます。

『さうだね、それぢやあ少し長くしても好いよ。』

『いいですか、坊つちやん。』

それでいよいよ狸は眞實の狸の手になりまして、お腹を撫でまして、

『初めます。』

と云ひました。太郎さんも花子さんも手を膝の上へ載せて腹皷を聞かうとして居ます。

『ぽんぽん、イヤホ、ぽんぽん、ぽんぽんぽんぽん、イヤホ、ぽんぽん、イヤホ、ぽんぽん。』

『上手だね。』

『上手ね、兄さん。』

『上手で御座いますねえ。』

三人とも感心してしまひました。

『狸さん。』

『はい。』

狸も思はず知らず狸さんと云はれて返事をしたものですから、顔を赤くして居ます。

『君は狸でせう。』

『はい。』

狸は恐入つてお辭儀をして居ます。

『何故兎に化けたの。』

『まことにすみません。』

『何故化けたの、云つて御覽。』

『はい。』

もう狸はすつかり眞實の狸になつてしまひました。

『私は坊つちやん、皆がね、狸と兎と云ふ話になると何でも兎が好い、狸が惡い、兎はいい子だ、狸は惡い子だと云ふものですから兎になりたくなつたのです。』

『狸だつて今はかちかち山の時のやうな惡いことはしないだらう。』

『するもんぢやありません。』

『それではいいぢやないか、いくら惡口を云はれたつて、自分が善いことをばかりして居れば神樣は太切にして下さるよ。』

『さうでせうか。』

『さうだとも。』

『ありがたう、坊ちゃん、もう兎に化けたりなぞは決していたしません。』

『狸でいいよ。』

『はい。』

『私等も可愛がつて上げるからね、お月夜の晩などはまた腹鼓を打ちに來て頂戴。』

『はい、まゐりますとも。』

『君にお菓子を上げよう。』

『私も上げるわ、蜜柑を。』

と花子さんも云ひました。狸は太郎さんと花子さんからお菓子と

蜜柑を貰ひまして、よろこんでかへりました。

蟲の病院

またネルの着物を着る時節になりました。

大磯でお別れしてから四十日になります。私ばかりでなく、年ちやんも武ちやんもみなあなたをなつかしがつて居ります。一度お遊びに御出で下さいませんか。いつやらお話いたしました病院は、兄さんや姉さんのお世話で出來ました。患者は只今十名ほど居ります。秋は病氣になるものが多いさうですね。貴女もお大事に遊ばせ。さよなら。

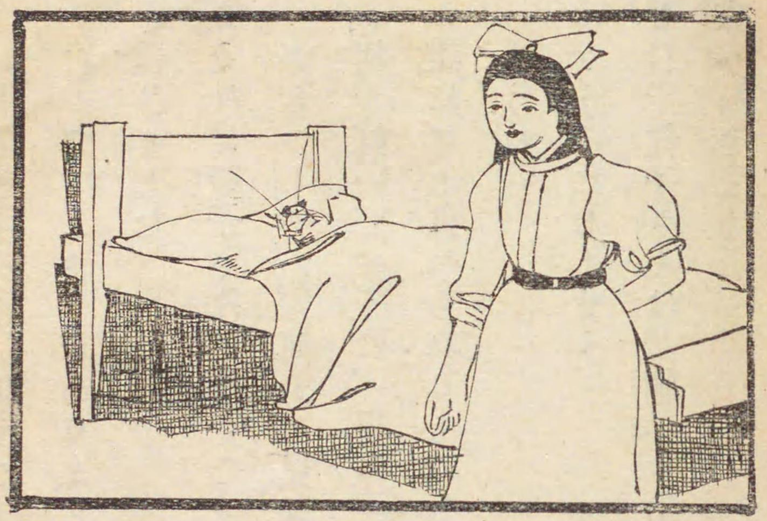
千代子さんは、豐子さんから、かういふ手紙を貰ひました。うれ

しいと思つて讀みましたが、おしまひに書いた病院のことは、理由がわからないで困りました。

『病院つて、豐子さんのお家は、お醫者樣でもいらつしやらないのにね。どうしたことなんかしら、どんなお話を私伺つたのだらう。』

またよくよく考へてゐましたが、暫くして千代子さんはうれしさうにうなづきました。

『さうだわ、あのことに違ひない、豐子さんのお家はお庭が廣いので、毎日散歩をなさると、築山の裾や木のかげや石の上などに、いろいろな蟲が病氣をして困つて居ることがあるつて、そんな蟲の爲めに病院をたててやるつて、さう仰しやつたわ。豐



子さんはえらいのね、なんでも思つたことをしとげなさるのだから。』

かういひましたが、千代子さんは急にその病院が見たくて見たくてならなくなりました。それでお母さんのお傍へまゐりまして、

『母樣、大磯にいらしつた豐子さんからね。』

と、豐子さんの手紙を見せまして、

『その病院はね、病氣になつた蟲の

お世話をする病院なんです。母様、私その病院へお見舞に行きたくつてしやうがありませんから、やつて下さいな。』

と言ひました。

『それは豐子さんは好いことをなきるね。明日の朝のうち行つていらつしやい。何かお見舞の品を持つてね。』

『何が好いでせうね、母様。』

『誰にでも食べられるものをね、さうだね、蜂蜜なんかが好いだらうね。』

『さういたしませう。』

翌日千代子さんは、朝早く出かけまして、小石川の豐子さんのお家へ行きました。

『千代子さん、よくいらしつて下すつたのね。』

豐子さんはなつかしげにかう云ひました。

『お手紙をありがたう。急に伺ひたくなつてね。』

千代子さんは、それからお座敷で年ちやん武ちやんといふ豐子さんの妹達にもあひました。

『病院の方へこれはお見舞です。何かと思ひましたけれど、蜂蜜の外に考がつきませんでしたわ。』

さう言つて、風呂敷に包んだ蜂蜜の壺を一つ出しました。

『まあさうですか、どんなに患者たちがよろこぶでせう。』

豐子さんは、まるで院長様のやうな調子で言ひました。

『見舞に行つてもよろしくつて。』

『いいんですとも、千代子さん、私たちはおしたくをして來ますわ。』

妹の年ちやんがかう言ひまして、武ちやんと一緒に彼方へ行きましたが、暫くすると、二人は直白な看護服を着て來ました。

『さあお供いたしませう。』

二人はものいひまでがしつかりとして來ました。千代子さんはお草履を借りて、豐子さんと四人で庭の秋草の茂つた中をわけて、病院へまゐりました。病院は木造の小い家ですが、棟が三つほどにも分れて居ます。間毎に白い窓掛がかかつて居ます。

『まあいい處ですね、せいせいするところですね。』

と千代子さんは言ひました。玄關と思ふ處からは、細いけれども

綺麗な廊下が、ずつと奥の方まで通つて居ます。

『まあ入口の方から一つ一つ尋ねてやつて下さい。一號二號は空いて居ます。三號室は蝶が入つて居るのです。』

『まあ蝶が病氣ですか、可愛さうね。』

人が入つて來たけはひがするので、白い蝶は羽を此方へかへして、寢臺の上で寢がへりをしました。

『院長樣、今日は。』

『寢たままでいらつしやいよ、どうですか。』

『ありがたう、もう大方よろしうございます。看護婦さんも御一緒ですね。』

二人の妹はうなづきました。

『この方はね、千代子様と仰しやるのです。患者の方のお見舞につて、蜂蜜を下すつたのですよ。』

『さうですか、恐れ入りました。』

この蝶は、白い鶴の羽の様なものを一枚裾の方にかけて寝て居ました。其處を出ますと豐子さんは、

『千代子さん、あの蝶はね、まあ年の病とでもいふのでせうね、けれども滋養物を澤山食べさせましたから、また元氣になりさうよ。』

といひました。

『まあ、うれしいことね。』

『四號室にはね、小い患者が居ります。』

看護婦の武ちやんは、かういひました。

『小兒科の患者ですか。』

『さうでもないのですよ、ただ身體が小いのですよ。』

入つて見ますと、まことにここには一寸ほどの小い寝臺があります。見ると罌粟粒を枕にして蟻が寝て居ります。

『おや、蟻さんですね。』

『この患者の聲は、あまり小くて聞えないんですよ、けれどおほよそ分つたのはね、なんでもね、藏へものを運んで居たら、上から石が落ちて來て、藏がつぶれてその下敷になつたらしいのですよ、澤山死んだ中でこの患者だけが息があつたので、急いで病院へ入れました。』

『そしてよくなりまして。』

『もう大方好いのです。』

と豐子さんはうなづきました。それから五號室へ入つて行きました。札にはハタオリと書いてありました。

『これは太切な患者なんですよ。』

『どうして。』

『あのね、ありまり機を織つたので手を折つたらしいつて兄樣が仰しやつたのですわ。』

と豐子さんは小聲でいひました。

『はたおりさん、もうけふ繃帶を替へてもらひましたか。』

『はい、今朝ほどすませていただきました。』

と機織蟲は女らしくいひました。それから其の次の室に入りますと、患者の寢臺の上に鈴が三つほど吊つてあります

『あれはなんですか。』

と千代子さんがいひますと、

『こほろぎさんはね、あんまり歌をうたつたものですから、御病氣になつたのです。それですからね、啼かないやうにさせて、滋養物を食べさせて居ますがね、患者は歌をうたふことが出來ないものですからね、看護婦に鈴をあすこへつつてもらつて、寢ながら絲をひいて鳴らすのを樂しみにして居るのです。可哀さうですね。』

と千代子さんはいひました。小い看護婦さんは、此處でもお土產

に蜂蜜を貰つたことをいつてきかせました。

『ありがたうございます。』

と、こほろぎはいひました。七號室へ入らうとする時、豐子さんは、

『貴女、どんなものを見てもびつくりなさらないこと。』

『いたしません、けれど。』

『けれどつて、千代子さんよしませうか。』

『蛇ですか。』

『さうぢやありません、蛙ですよ。』

『私、蛙なら好きですよ。』

千代子さんは、ほつと息をつきました。

『それでも、大分大きいのですよ。これは少し下等な病氣でね、ものの食べ過ぎなんですよ。』

入つて行きますと、赤い烏瓜を枕にして、藁の上に蓮の葉を敷いた寢臺に寢て居るのはひきがへるです。豐子さんを見ますと、蛙は、

『院長樣、院長樣、今日は瓜を一切位戴いてもよろしうございますか。』

といひました。

『まだ無理ですよ。』

と豐子さんはいひました。

『いけないのですか。』

『いけませんねえ。』

『弱つちやつた。毎日毎日牛乳ばつかりで、小い虫の一つも食べさせて貰へないのだから厭になつちまふ。』

『それでも、病氣が後もどりしますからね。』

看護婦はやさしくかういひました。

『私は死んでもよろしいから、一切瓜が食べたい。』

『そんなことといふのは下等なことですよ。蛙さん、ねえ蛙さん、あなたは蛙の中でも立派な蛙さんぢやありませんか。』

『はい。』

蛙は泣き出しました。

『ごう、ごう、ごう。』

これでも忍び泣きなんでせう。

『りこうな蛙さんね。』

『院長様、私が悪うございました。もう決してわがままを申しません。』

暫くして蛙はかういひました。

『ほんたうによくわかりましたね、それではね、この方の御見舞にいただいた蜂蜜を、後ほど分けて上げませう。それをお食べなさい。』

『まあ、ありがたい。』

蛙は起き上つて、おじきを一つしました。四人は笑ひながら出て行きまして、その次の室に行きますと、月見草の花のやうな色を

した蝶が、よく寢入つて居るものですから、四人はそつと出て行きました。九號室はばつたのお爺さんださうです。

『米つきばつたなんですよ。』

『どういふ風に悪いのです。』

『かつけのやうですよ、今は弱つて居ますがそのうちによくなるでせう。』

と豐子さんはいひました。ばつたのお爺さんも、蜂蜜をよろこびました。それから水すましの寢て居る室へ行きました。この虫の寢て居る處は寢臺のやうですが、それは箱で、中には水が入れてあつて、藻の草などが敷いてあります。水すましは、土の上で目を白黒させて、日射病にかかつて居たのださうです。』

『はやくお池へかへりたいでせうね。』

年ちやんがいいますと、水すましはうなづきました。馬追虫の室では、妹たちが二疋きて話をして居ました。

『姉さん、早くよくなつて歸つて頂戴な。ほんとに姉さんが居ないと心細いんですから。』

『さうだらうね、もうなほるよ。』

驚かしては悪いと思つて、四人はそのまま歸つて來ました。

お留守番

母様は、冬子さんと夏子さんと太郎さんとの三人に、

『母様とお父様とは御用があつて一寸外へ出なければなりません。

貴方がたは何時ものやうにおとなしくお留守をして下さい。それから今日は寒い寒い風が吹きますから、外へ出ずになるべくこのお部屋の中で遊んで居て下さい。動物園へつれて行つてくれなどと、太郎さんも云つてはいけませんよ。五時になつたら、母様とお父様は歸つて來て、皆と一緒に御飯をたべます。行つて來ますよ。』

と仰しやいました。

『行つていらつしやい。』

『おとなしくしてます。』

『五時にはきつと歸つて來て頂戴。』

と三人が云ひますと、

『五時にはきつと歸つて來ますよ、さよなら。』

お父様と母様は直ぐお出かけになりました。母様が遊んでゐるやうにと仰しやつた此のお部屋は、三十疊敷程の西洋室で、平常はお父様と母様の居間になつて居るところです。

冬子さんと、夏子さんと、太郎さんの三人は、繪の本を見たり、ピヤノを彈いたりして遊んで居ましたが、三時頃になつて太郎さんは、

『つまらない、なあ僕はもう厭になつちやつた。遊びに行きたいなあ。』

と云ひました。

『そんなこと云つてはいけません。』

『外は寒いからと母様が仰しやつたのだから。』
冬子さんも夏子さんも初めはさう云つて居たのです。
『一寸でも外へ出てはいけないのでせうか。』
『直ぐ歸つて來ればいいかも知れない。』
『動物園が好いなあ。』
と太郎さんが云ひました。
『動物園は眞實に面白いところね。』
『鳥なんか見るのは面白いものね。』
『姉さん行きませう、動物園へ。』
太郎さんが大きい聲で云ひました。さうすると三人の外には誰も居ないと思つて居た此のお部屋で、

『いけない、いけない。』
と云ふ聲がしました。
『誰です、いけないと云つたのは。』
驚いて太郎さんがかう云ひますと、
『外へ出てはいけない、いけない。』
とまた云ふのです。よく見ると、壁にかかつてある大きい時計が云つて居るのでした。
『時計さん、動物園へ行つてはいけないの。』
『いけません、いけません。』
『そんなら、私たち、どうして遊びませう。時計さん敎へて下さい。』

と冬子さんが云ひました。

『このお部屋で動物園をこしらへて遊びなさい。』

と時計が云ひました。

『そんなことは出來ないぢやありませんか、獸も鳥も居ないのですもの。』

『動物が出てくるやうに神樣にお願ひして上げませう。』

時計はまた聲を改めまして、

『神樣、この子供達を遊ばすために、暫くの間、この部屋にある品物を動物にして下さい。』

と云ひました。さうすると何處かで、

『よし、よし。』

といふ小聲が聞えました。時計はまた子供達に、

『さあ何なと好きな動物の名を呼んで御覽なさい。』

と云ひました。

『熊。』

太郎さんが大きい聲で云ひましたら、壁にかけてありましたお父樣の洋服が、むくむくとした熊になりました。

『をしどり。』

と冬子さんが云ひますと、花瓶にさした花が二羽のをしどりになりました。

『らくだ。』

と太郎さんが云ひますと、ピヤノが大きいらくだになつて歩き出

しましたので、三人は驚きました。

『獅子。』

とまた續いて云ひましたが、今度はストオブが獅子になるのでした。

『もるもつと。』

誰かがさう云ひますと、先程からお皿の上にあつたお饅頭が、皆可愛らしいもるもつとになりました。

『いんかう。』

さうしますと、籠に入つてゐた林檎が、いんかうになりました。

蜜柑は金絲雀になりまして、柘榴も綺麗な小鳥になりました。

『狸。』

と云つたのは太郎さんでせう。さうすると、棚の上にあつた水差が狸になつて、ひよつくりひよつくりと出て來ました。

『鹿。』

鹿は母樣の吾妻コオトが化けるのでした。

『孔雀さん。』

夏子さんが大きい聲を出して云ひますと、かざりのついた安樂椅子が孔雀になりました。その外の椅子は雉子になつたり、金鷄鳥になつたりしました。

『虎。』

さういひますと、黄色のまどかけが虎になりました。

『象。』

お部屋のまん中の大きい机が象になりまして、小いのは羊になりました。

『猿。』

何が猿になるのかと思ひましたら、盆栽の松の木が猿になりました。

『鳩。』

と冬子さんが云ひますと、お父様のひぢつきが鳩になつて、部屋の中を飛びあるきました。

『兎。』

兎には銀の湯わかしがなりました。大きい二つの硯は黒い蝙蝠に化けました。帽子が鷹になりまして、帽子掛がカンガルウになり

ました。

『うぐひす。』

と云ひますと、金の小いお時計が鶯になりまして、

『ほおけきよお。』

と歌ひました。

『驢馬。』

長椅子がうさぎうまになりました。

『鶴が居ない。』

氣が付いて夏子さんが云ひますと、母様の白いショオルが鶴になりました。その外壁にかかつた澤山の繪の額などもいろいろな綺麗な鳥になりますし、澤山ある書物も、それぞれの動物になりま

したので、もうこのお部屋は一ぱいになりました。然しそれが皆眞實の動物ではありませんから、けんくわも、かみあひもいたしません、眞實におとなしいのです。

三人は大よろこびで、けものの頭を撫でたり、小いのをふところにいれたり、おんぶをしてやつたり、をしどりを手の上に載せたり、あうむにものを云はせたり、虎に乘つたりして面白く遊んで居ました。さうすると、

『五時になる、五時になる、五時になる。』

と時計がいひました。

『おや、それではもうお父様やお母様がお歸りでせう。』

『姉さんしかられるでせう。』

二人のお嬢様はあわてました。太郎さんは泣聲を出して、

『厭だなあ、僕は厭だなあ、動物園ごつこはもうよすの、厭だなあ。』

と云ひました。さうすると時計が、

『またこんど、またこんど、またこんど。』

と云ひました。何時の間にやら澤山の鳥や獸はもとの品物になつてゐました。お父様とお母様は御機嫌よくお歸りになりました。

山あそび

春子さんと太郎さんの、お父様のお父様の家は河内の國にあるのです。さうなものですから、二人は小い時から、楠正成の居た千

早の城や、赤坂城のお話やらを聞いたり、また觀心寺といふお寺には、正行の所へ敵方から送つて來ました正成の首を葬つたお墓があるといふこと、三日市といふ金剛山の山裾のお父樣の村で、お父樣や伯父樣の小い時、兎狩りをなすつた話などを聞いて居たものですから、いつもお國へ行きたい、お國へ行きたいと思つて居ました。丁度今年はお祖母樣の賀のお祝ひがあるといふので、二人をお國へ連れて行つてやるとお父樣が仰しやいました。そしてお國の伯父樣の方へお父樣はさう云つてお上げになりました。さうすると從妹の花子さんから、こんなお手紙がきました。

春子樣、私は嬉しくて嬉しくて仕方がございません。もう二十日しますと、叔父樣や、あなたや、弟さんの太郎さん達が、お

來し下さると思ふと、夜分もよく寢られません。東京とはちがひまして、私の方は田舍ですから、別にお慰みになるやうなこともないでせうが、私の家にも幾ちやんといふ弟が一人ありますから、四人でお話をしたり、山へまゐつたりして遊びませう。私の方の山には兎が澤山居ります。六寸位の丸さの兎ならば、山へ行かないでも、田圃の道にでもころころとして居ます。私は兎をつれてくる袋を五つ縫うてあなた方を待つて居ます。一つは近所の文ちやんといふおどけものの男のお子に貸して上げるつもりです。それからまた、私のお父樣やあなたのお父樣などと一緒に、千早や觀心寺を見物にまゐるのもたのしみにして居ます。それまでにあなたも太郎さんも御病氣にならぬ樣に

して下さい。

手紙を見て。春子さんも太郎さんも嬉しいものですから、御相談をしてお返事を書きました。

お手紙ありがたう。二十日と仰しやいましたが、もう十六寝ればよろしいやうになりました。私も太郎も毎日、日記には河内といふ所はどんな所であらう、といふことを書いて居ます。楠さんで名高い所を見せていただくのも嬉しうございますが、兎とりのお話をききましてからは、毎日夢にまで見るほどでございます。袋をお縫ひ下さいましてありがたうございます。どうそ幾雄さんにも、その文ちやんといふお子にも、よろしく言つて下さい。

いよいよその日になりましたので、春子さんと太郎さんは、お父様と御一緒に、汽車に乗つてお國へまゐりました。伯父さんのお家へつきましたのは、翌日のおひるごろでございました。

『兎は何處に居るの。』

と太郎さんは御挨拶が濟むと、すぐ花子さんに問ひました。

『縁側へいらつしやいな、そら見えるでせう、あの山ですよ。』

『隨分高い山ね。』

と春子さんがいひました。

『あの眞實の上へ上るのぢやないんですよ、下の方にも澤山居ることがあるのです。』

『早く行きたいですね。』

『明日、朝から行きませうね。』

と花子さんがいひました。それから東京のお話をして下さいと幾ちやんがいふものですから、春子さんはお土産にもつて來ました繪草紙を出して、上野や日比谷や淺草や隅田川のお話をして上げました。

もう四人は大の仲好になりました。

あくる朝、

『太郎さん、早く起き給へ、文ちやんがもう來ましたよ。』

と幾ちやんが起しにきてくれました。太郎さんは飛んで起きました。花子さんは袋を五つと笛を五つ出しました。

『これを腰へつけてね、それから笛をもつんですよ。』

『何故笛をもつの、兎は笛が好きなんですか。』

と春子さんが問ひますと、

『さうぢやないんです、これはね、山へ皆で一緒に行くと、兎が驚くでせう、ですからね少し別れて林の中へ入るのです。そしてね兎がとれるとこれを吹くのです、さうすると皆がよつて見るんですよ。』

『面白い、面白い。』

と太郎さんは大よろこびです。

『ピイ、ピイ、ピイ。』

と笛を吹いて見ました。

『山へ行くのに歌をうたつて行きませう。』

といつて、皆が、

『君が代がいいでせう。』

といふことにしましたが、文ちやんは、

『僕はせいせいをうたひます。』

といふのです。何だらうと思つたのですが、暫くして、春子さんや花子さんや、幾ちやんや太郎さんが、

『キミガアヨオハ。』

と歌ひ出しましたら、文ちやんも、

『生々藥館の製劑は。』

と歌ひましたので皆はおどろきました。文ちやんは學校でも可なりよく出來る子なんですけれど、おどけものなんです。

『さあ皆さん別れませう。兎がとれたら笛を吹いてね。』

と花子さんが指圖しますので、皆はちりぢりに林の中へ入つて行きました。それから五分間もしたと思ふころ、

『ピイ、ピイ、ピイ。』

と笛がきこえました。皆は大急ぎで集りました。袋の中に入れて

居るのは文ちゃんです。

『とりましたよ、僕が後から抱いたの、そつととつて袋に入れてやつたのです。』

『見せて下さいな、にやあ、にやあといふやうぢやありませんか。』

と花子さんがいひました。文ちゃんは袋をあけて、一寸春子さんに見せました。

『山に居る兎はこんなもの、猫のやうですわ。』

春子さんがいふものですから、幾ちゃんがも一度よく見ました。

『文ちゃん、これは猫ぢやありませんか、内の玉ですよ。』

『さうかい、君。』

と文ちゃんが袋から出したのは、花子さんの家の玉といふ猫でし

た。

『まちがつちやつた、まちがつちやつた、こんどは眞實のをとりますよ。』

といつて、又文ちゃんは林の中へ入つて行きました。さうして皆があるき出すか出さないのに、また、

『ピイ、ピイ、ピイ。』

と笛を吹きました。

『とれましたよ。ピイ、ピイ、ピイ。』

『ほんたうの兎ですか。』

と太郎さんは大きい聲でききました。

『眞實のですとも、今度は大きいのですよ、ピイ、ピイ、ピイ。』

と笛を吹きながら、文ちやんは出て來ました。

『重さうね。』

『重かつたですとも、そら見て御覽なさい。』

と文ちやんは花子さんに見せました。

『何だかわんわんといつてるやうね、よく見えなかつたわ。』

『犬ぢやないか、君。』

『さうかも知れないよ。』

と文ちやんも心配さうにいひました。太郎さんが、

『僕が見て上げやう。』

といつて覗いて見まして、

『姉さん、東京から連れて來たポチですよ。』

『さうですか、僕はあんまり急いだものですから。』

といひながら、文ちやんが袋から出しましたのは、太郎さんの白犬のポチでございました。皆はまた笑ひましたが、それからまた山へ入りました。春子さんも、太郎さんも、幾ちやんも、文ちやんも、一つづつの兎をとることが出來ました。

ニコライと文ちやん

文ちやんはお國に居た時、人から、東京にはニコライと云ふ大きいものがあることを聞きました。

『大きいつて、どれ位なの。』

『それや大きいものですよ、とてもお話では出來やしません。』

『見たいなあ。』

『東京へ行つたら直ぐ見に入らつしやい。けれど見に行かないだつて、頭の先だけなら、新橋からでも何處からでも見えるでせうよ。』

『頭の先だけぢやつまらない。顔が見えないぢや、僕は東京へ行つたら直ぐ見に行きます。』

さう云つて居るのでした。それから文ちやんが東京へ來て、車で下谷の親類へ行きまた時、車夫に、

『ニコライさんは何處に居ます。』

と問ひました。

『そら彼處に頂上だけが見えます。』

と車夫が教へてくれました。

『何處に、何處に。』

『そら、黑いてつぺんが見えるでせう。』

『見えた、見えた。』

と文ちやんは嬉しさうに云ひました。文ちやんはニコライの屋根を見て　ニコライさんは黑い冑を被つて居るなあと思ひました。そしてニコライさんは座つて居るやうだが、あれで立上つたらどうだらう、天に穴が明くかも知れないなあと考へました。

『何だつて大きい人だなあ。』

と獨言を云つて居ました。それから文ちやんは大分東京になれて來まして、道などもあらかた分るやうになりました。文ちやんは

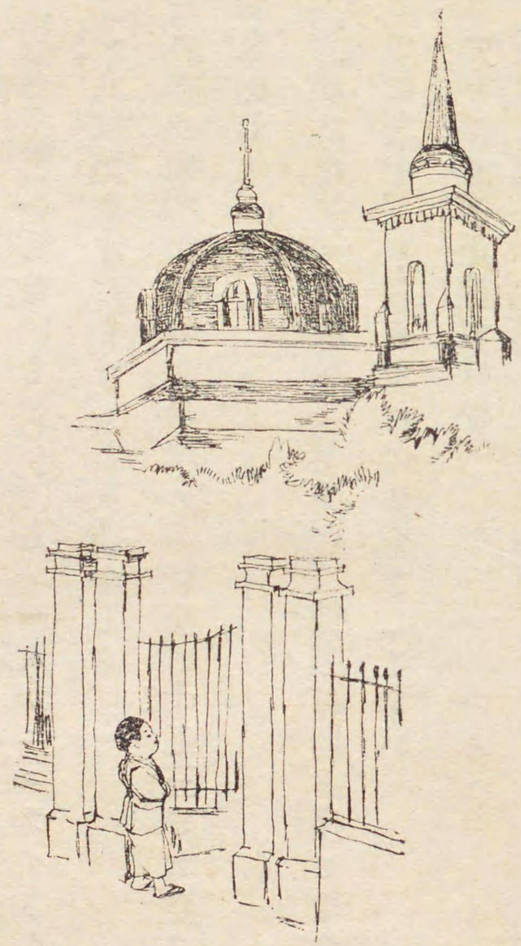
國に居た頃から顔が見たい見たいと思つて居たのですから、人に教へて貰ひまして、ニコライのある駿河臺へ來ました。夕方であつたものですから。門は閉つて居ましたが、門の柱には『ニコライ』といふ標札が出て居ます。

『僕はニコライさんはことによると生さて居る人ぢやないかと思つたが、標札が出て居るからまだ生きて居るのだなあ、見えないかしら、ニコライさんは居ないかしら。』

文ちやんはあまり傍近く行つて居るものですから、上にニコライの御堂が高く高くそびえて居ることに氣が付かずに居ましたが、鐵の門の間から覗きまして、右を見たり左を見たりして居りますうちに、ふと上を向いて、初めてお堂の屋根に氣が付きました。

『やあ、やあ。』

と、びつくりした聲を一人で出して居ます。



『ニコライさんは僕の前に居たのだなあ、驚ちやつた。』

そのうちに文ちやんは、ニコライの本堂の方の圓屋根と、鐘撞堂の方の尖つた屋根とが、二つ竝んで居ることに氣が付きました。

『おやあ、ニコライさんは二人居るぢやないか、ニコさんと、ライさんなのかなあ、標札をよく見やう、さうぢやないだらう、竝べて書いてないもの、何方か一人がニコライさんに違ひない、一人は弟さんだらう、お友達かしら。』

ニコライの門の横の小ひ戸をあけて、十二三のお嬢さんが一人出て來ました。

『お嬢さん、一寸教へて下さい、彼處に居る痩せぽつちの人と肥つた人と、どちらがニコライさんですか。』

『ニコライ僧正様ですか。』

お嬢様は此處の一番えらいお坊様の、ニコライ僧正さんのことを、文ちやんが尋ねて居るのだと思つて居るのです。

『其處に二人ゐらつしやるのは、何方がニコライさんなのですか。』

『僧正様はもうお寢つていらつしやいますよ。』

『さうですか、二人居るのは誰ですか。』

『二人人が居ましたの。』

お嬢様は歩きながらかう云ひました。

『彼處に居たのがニコライさんぢやないのですか。』

『それは門番でせうよ。』

『さうですか、あの二人は門番ですか。』

『門番は二人居ますよ。』

『ニコライさんは、門番よりも大きいですか。』

『僧正様は門番よりも大きいですわ。』
『ニコライさんは何を食べて居ます。』
『パンだの何だの。さよなら。』
お嬢様は電車に乗る爲にお茶の水の方へ行つてしまひました。
『驚いたなあ、ニコライさんかと思つて居たら、あれが門番だつて、ニコライさんはもつと大きいつて、驚いちまふなあ。今度はお書のうちに行つて見やう、門番だけを見て居ちやつまらないから。』
それから文ちやんは、時々ニコライの門へ來て見るのですが、何時も門番だとお嬢様の敎へてくれたものの外には居ません。丁度二十度ほども行つた頃、やつぱりあれがニコライさんぢやないか

と文ちやんは思ひました。それでまた道を通る人に、
『もし、もし、あれが眞實のニコライさんですか。』
と問ひました。
『あれが眞實のニコライだよ。』
その人は無造作に云つて行つてしまひました。
『なんのことだ、やつぱりあれなのだ。けれど二人だなあ。何方がニコライさんなのかなあ、さうだ、今度は少し大きい聲を出して、自分で聞いて見やう。』
文ちやんは口を大きく開けまして、
『其處にお出でになるお方、何方がニコライさんですか。』
そんなことを云つても、お堂は人ぢやありませんから、ものを云

ひません。

『貴君方、どちらがニコライさんですか、まだ聞えませんか、ニコライさん。』

あんまり大きい聲を出して苦しいものですから、文ちやんは暫く默つて居ましたが、また、

『右の方にいらつしやる痩せぼつちの方ですか。左の方にいらつしやるふとつた方ですか、ニコライさん、ニコライさん、ああ、いやになつちまつた。』

文ちやんは歎息をしました。

『痩せぼつちの方ですか、肥つた方ですか。ニコライさん、ニコライさん。痩せぼつちの方ですか、肥つた方ですか。弱つちま

ふな、僕は聲が小いから駄目だ。』

その日は文ちやんはあきらめて歸つて來ました。それから毎日文ちやんは大きい聲を出すけいこをしてゐましたが、文ちやんはだんだん大きい聲が出るやうになりました。

『もう大丈夫だ。ニコライさんとお話が出來る。』

大よろこびで文ちやんはまた駿河臺へ來ました。

『ニコライさん、ニコライさん。』

さうしますと、ニコライの鐘撞堂の方で、

『があん、がんがらがん、があん。』

と鐘が鳴り出しました。文ちやんは、自分の云つたことがニコライさんに聞えて、返事をしてくれるのだと思つて、嬉しくつて、

嬉しくつてなりません。

『があん、がんがらがん、があん』

『はい、はい、はい。』

鐘の音を文ちやんは、

『文ちやん、文ちやん、文ちやん。』

と云つて居るのだと思つて居るのです。

『があん、がんがらがん、があん。』

『はい、はい、私は文ちやんですが、ニコライさんは、あの痩せ。』

『があん、がんがらがん、があん。』

『はい、はい一寸待つて下さい、ものが云へないぢやありませんか。はい、はい。』

『があん、がんがらがん、があん。』

『弱つちまふなあ、さう文ちやん、文ちやんと云はれちや。ニコライさん、貴君は痩せぼつちの方ですか、肥つた方ですか。』

そのうち鐘は鳴りやんでしまひました。

『おや、どうしたのです、ニコライさん。』

もう鐘は鳴りません。文ちやんは痩せぼつちの方がものを云つたのだから、あれだらうと思ひました。

蟲の音樂會

九月の十五日に、日比谷公園であつた音樂會のお話をいたしませう。新聞の廣告に出ましたのは八月の末でした。それは、

『蟲の中で、いい聲であると、自分で思つた方は、九月十五日に、日比谷公園の、音樂堂に來て、うたつて下さい。その中で、一番勝れた方には、金の笛をお上げします。なるべく皆さん來て下さい。』

と云ふのでした。鈴子さんも花子さんもそのお話を母樣から伺つて大よろこびでした。十五日を待ちかねて待ちかねて居りましたが、やがてその日になりました。鈴子さんと、花子さんと、弟の太郎さんとは、太郎さんのお友達の文ちやんと一緒に、日比谷へまゐりました。音樂堂の傍はもう人でいつぱいでしたが、やうやう共同椅子を一つ見つけまして、その四人の子供達と乳母とが腰をかけました。

『遲いわねえ。』

『蟲だからお月さんの出るのを待つて居るのでせうよ。』

『あら闇の晩でも啼くわ。』

『早く初まると好いのにねえ。』

などと云つて居る人達も御座いましたが、鈴子さんと、花子さんはおとなしくしてゐました。さうしますと、もう初りだと云ふことで人が一人出て來まして、開會の挨拶がありました。さあ、いよいよと云ふので聞いて居る人が皆唾を飲んで居りました。啼手も出て來ました。

『ぜみ、ぜみ、ぜみ、ぜみ、ぜみ。』

とうたひました。

『いい聲だねえ。』

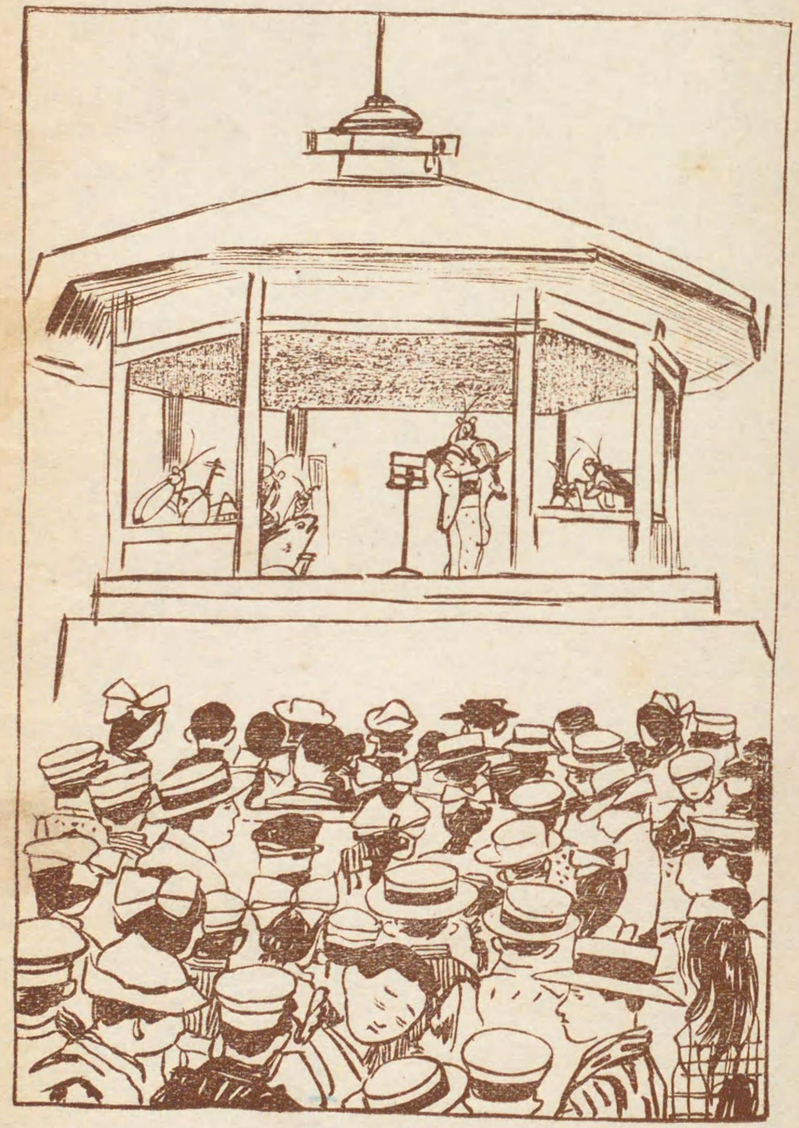
と文ちやんが云ひました。

『あれは油蟬ぢやないか、ちつとも好くない。』

と太郎さんは云ひました。油蟬はお米のほしひにしたのを一袋御褒賞に貰ひました。冬になつても蟻の所へ御無心に行かないでも好いと大よろこびで御座いました。二番目に出ましたのは草雲雀でしたから、あんまり小くて、人の目には長いお髭の動くのだけしか見えませんでした。

『ぴい、ぴい、ぴい、ぴい、ぴい。』

可愛らしい聲の草雲雀は、御褒賞に露の瓶詰にしたのを一本貰ひました。



『だんだんよくなるのね。』
『こんどは何でせう。』
と皆が云つて居ますと、大きいものがひよつくり飛び出しました。
『があ、があ、があ、があ、があ、があ、があ。』
蛙です。
『眞實にだんだん好くなつて來たねえ、もう金の笛をここらでやるかも知れない。』
と文ちやん一人だけは云つてましたが、さうではなくて、御褒賞はなめくじの鹽漬にしたのを一瓶貰ひました。その次は、
『きりぎりす、ちよん、きりぎりす、きりぎりす、ちよん。』
『好いね、君。』

何が出ても賞めるのは文ちやんです。きりぎりすは御褒賞に胡瓜を一籠貰ひました。

『すいつちよん、すいつちよん、すいつちよん、すいつちよん。』

馬追が出てまゐりました。

『あの聲を聞くと身體が寒くなるやうね、身にしむと云ふのでせうか。』

と鈴子さんは云ひました。馬追は銀の鈴を一つ貰ひました。それが濟みますと、急に、

『つくほうし、つくほうし、つくつくほうし、つくほうし。』

と啼き出しました。法師蟬なのです。これはお砂糖を一袋貰ひました。

『がちや、がちや、がちや、がちや、がちや。』

おそろしくやかましい轡蟲がその次に出て來ました。

『耳が遠くなるやうね。』

『雷よりもいやね。』

皆はかう云つてましたが、文ちやん一人は、

『勇ましいね、轡蟲は騎兵のやうだね、好いなあ。』

と云つてました。轡蟲は御褒賞に飴の瓶に入つたのを一つ貰ひました。その次はこほろぎです。

『ちんちろりん、ちろりん、ちろりん、ちんちろりん。』

『好い聲ね。』

『眞實によろしう御座いますね。』

と乳母までが云つて居ます。

『昨日お庭の萩の下で啼いて居たのが來たのでせうか。』

太郎さんがかう云ひますと、

『さうぢやないでせう、私の居間の窓に居たあれでせう。』

と花子さんは云ひます。

『さうぢやないでせう、違ふでせう、僕のお隣のお寺にはいつぱいこほろぎが居ますよ、彼處がこほろぎの家なんでせう、彼處の子でせう。』

文ちやんはかう云ひました。

を一つ貰ひました。こほろぎは玉でこしらへた小さい琴

『こほろぎは彈くでせうか。』

『それは彈きますとも。』

『今晩からはよく氣をつけて居ませう。』

『僕はお寺へ行つて見てこよう。』

と云ふのはまた文ちやんです。

『ちちりん、ちちりん、ちちりん、ちちりん。』

『おや、こほろぎがまた出て來たのかしら。』

『あれはこほろぎの弟かなんかでせう。』

と文ちやんは云ひましたが、これは日ぐらし蟬で御座いました。

日ぐらしは金の鈴を一つ貰ひました。今度出て來ましたのは、先刻の草雲雀と同じやうに小い蟲です。

『かん、かん、かん、かん、かん、かん、かん、かん。』

『何でせうね。』

『聞いたことがない蟲ですね。』

『西洋から來たのかしら。』

と皆が不思議がつて居ましたが、これは深い山などに澤山居る鐘叩きと云ふ蟲でした。この蟲は銀でこしらへた吊鐘の小いのを一つ貰ひました。其處へ先刻開會の挨拶をした人が出て來まして、松蟲と鈴蟲はこれから一緒にうたふから聞いてくれと云ひました。

『一緒ではどうでせうね。』

『よく分るでせうかね。』

『それや分りますとも、野では皆が一緒に啼いて居るのですもの。』

などと人は皆云つてましたが、いよいよ二疋の蟲が出て來ました。

『ちん、ちん、ちん。』

と松蟲が先づ啼き出しました。

『りん、りん、りん。』

と鈴蟲は歌ひます。

『ちん。』

『りん、りん。』

『ちん、ちん。』

『りん。』

『ちん、ちん。』

『りん、りん、りん、りん。』

『ちん、ちん、ちん、ちん。』
『これが一番ですね。』
『いつまでもうたつて居て欲しいのね。』
『鈴蟲――。』
『松蟲――。』
と、うれしさの餘りに騒ぐ人もありました。二疋の蟲は一本づつ金の笛を貰ひました。皆は大よろこびでお家へ歸りました。

螢のお見舞

これは花子さんの御病氣のよくなりかけの話です。花子さんは日日身體が元の通りになつて行くのが嬉しい上に、父様や母様が今

までの心配を忘れておしまひになつて、よろこばしさうにお出でになるので、なほなほ嬉しうございました。花子さんはお醫者様がもう起きても好いと仰つしやるまでは、決してお床をはなれないつもりで、毎日雜誌やら繪の御本やらを見ておとなしくして居ました。
ある日お父様が、
『花子、何かおもちやを買つて上げやうか』
と仰つしやいましたが、
『私、何もいらないことよ。』
と花子さんは云ひました。
『御本や雜誌はどうだ。』

花子さんは首を振りまして、
『こんなに澤山ありますから、好いわ。』
と云ひました。
『それでも何か一番好いものを云つて御覽、お前はお菓子も御病氣で食べられないのだから、慰みになるものがあつたら、何でも上げやう。』
あんまりお父様がさう仰つしやるものですから、
『私欲しいことはないのですけれど、一つだけ見たいものがありますの。』
『何だ、云つて御覽。』
『お父様、私螢が見たいのですよ。』

『螢が、よし、よし。』
とお父様は仰つしやいました。
『私ね、此間から見たくつて、見たくつて。』
『早く云へば好いに。』
『見せて下さるの、お父様、何時。』
『何時つて螢は夜分のものだから、今直ぐとりに行くと云ふわけには行かない。』
『それぢや今晩ですね、お父様。』
『さうだな、夕方になつたら梅や多吉に云ひ付けて、川の傍へさがしにやらう。』
『私、樂しみですわ。』

『夕方になるのを待つてお出で。』

かう仰つしやつてお父様はあちらへお出でになりました。花子さんは好きな螢が今晩見られることと思ふと、うれしくてうれしくて仕方がないのでした。まもなくその日も夕方になりました。花子さんは少し苦い藥をのんで、目を細くしてじつとして居ますと、目の前へぴかりと光るものが一つ來ました。おやと思ひますと、花子さんと同年ほどの女の子が一人枕元に居ます。光るのはその子のリボンなのです。

『どなた。』

と花子さんが云ひますと、女の子は笑ひながら、

『螢ですよ。』

と云ひます。

『螢さんなの、まあよく來て下すつたのね。』

と花子さんは云ひました。螢の子のリボンはぴかりぴかりと光つて居ます。

『御病氣はいかが。』

と螢の子はやさしく云ひました。

『もう大分好いの、お父様や母様もよろこんでいらつしやるわ。』

『よかつたのね。』

『貴女、私待つて居たのですよ、よく家が分つたのね。』
と花子さんが云ひますと、
『私さう思つてね、自動車で來ましたわ。』
かう螢は云ひました。
『自動車で、さう。』
花子さんが云つて居ますと、そこへまた一つ光るものが見えました。
『よくいらつしつたのね。』
と螢の子が云ふものですから、なほじつと見てゐますと、光るリボンをさした子が、も一人來て枕元に居るのです。
『お見舞に來ましたわ。』

今度の螢の子が云ひました。
『よく來て下すつたのね、貴女も自動車に乘つていらしつたの。』
『さうぢやいなの、私電車ですよ。』
今度の螢がかう云ひながら、
『また皆樣がいらしつたわ。』
と云ひながら、座敷の入口の方を見るものですから、花子さんも見ますと、光るリボンの子が五六人もまた入つて來ました。
『今日は。』
『よく來て下すつたのね。』
『私人力車に乘つて來ました。』
『今日は、私は馬車に乘つて來ました。』

『今日は、私は帆前船に乗つて來ました。』
『今日は、私は蒸汽船に乗せてもらつて來たのです。』
『今日は、私は風船で來ました。』
『今日は、私はボオトをこいで來ましたわ。』
『皆様、よく來て下すつたのね。』
花子さんは、さう一々云つて居られないものですから、一緒に挨拶をしました。さうして居ますと、今度は數へきれないほど澤山な螢が一緒に入つて來ました。花子さんは目をみはつて驚いて居ました。
『汽車に乗つて皆が一緒に來ました、花子さん今日は。』
その中で一番大きいリボンをさした子がかう云ひました。

『皆で遊びませうね、鬼ごつこをしようぢやありませんか。』
と一人の螢の子が云ひますと、
『鬼ごつこをしませう、鬼ごつこ、鬼ごつこ。』
『さあ、鬼ごつこですよ。』
皆が立ち上りまして、
『じやんけんぽい。』
と大勢が云ひまして、それから鬼がきまりますと皆の子が座敷を飛んで逃げ廻ります。それがみな光るリボンをさして居るものですから、そのきれいなことと云つたら、云ひやうがないほどなのです。花子さんも何時の間にか病氣を忘れて、その仲間へ入れて貰はうとしました。さうしますと一番先に來た螢の子が、花子さ

んの傍へ來まして、

『貴女、御病氣に好いこと、どうもなくつて。』

と云ひました。

『さうね、惡いでせうね、じつとして居る方が好いでせうね。』

花子さんはかう云つて、またもとのお床へ歸らうとしますと、

『それぢやね、かうなさいな、私等のために貴女のお父樣がこしらへて下ずつた籠はね、それはそれは大きい籠なのですよ、其處へ貴女も來て、皆の遊ぶのを見て、そして身體をじつとさせて居たら好いでせう。』

と云ひました。

『それぢや連れて行つて下さいな。』

と花子さんが云ひましたら、

『さあ皆樣、花子さんの手を引いてお上げなさいな。』

大勢の螢は花子さんを介抱して、大きい大きい螢籠の中へ連れて行きました。籠のかたちは四角です。花子さんは嬉しくて、

『ありがたう。』

と云つたと思ふと、それは夢であつたことに氣が付きましたが、花子さんの蚊帳の中には、お父樣が放して下すつた螢が澤山とんで居ました。

紅葉の子供

お花さんは、お父樣と母樣の三人で京都の紅葉を見に行くことに

なりました。お花さんはうれしくてなりません。

『母様、紅葉は拾つて來ても叱られませんか。』

『叱られないよ。』

『私そんなら、何時か母様に戴いた切で、千代に縫つて貰つた大きい信玄袋を持つて行つて、澤山澤山紅葉を入れて來たいわ。』

『それは好いね。』

と母様は仰しやいました。いよいよその日になりましたので、お花さんは新橋から汽車に乘りました。新しい信玄袋を持つて送つて來た千代が、

『お嬢様、さよなら、この袋に入るだけ京都の紅葉さんをおつれして下さい。』

と云ひました。

『紅葉さんと一緒に歸るから待つてて頂戴な。』

汽車に乘つたお花さんが、その翌朝母様のお膝の上で目を覺した時、

『お花さんや、もう直ぐ京都ですよ。』

と母様は敎へて下さいました。

『さうですか、紅葉は。』

『まだ見えないけれど、お顏を綺麗に洗つておかないと、京都の紅葉に笑はれますよ。』

お花さんは、汽車の中でおつくりをして戴いて、京都の停車場で降りたのは七時頃でした。お花さんは伯父さんのお家へ行く車の

上で東の方を見ますと、青い山のところどころに、燃えて居る火を置いたやうな赤い色のものがあります。

『母様、あれは何でせうね。』

『あれはね、お花さんを待つて居る紅葉ですよ。』

と母様が教へて下さいました。その日は伯父様のお家で、伯父様や伯母様と、父様や母様のお話なさるのを、大人しく傍で聞いて居ましたが、心の中では早く紅葉が見たくて仕様がないのでした。高雄や栂の尾が丁度見頃だといふので、翌日は三人の外に伯母様も交つていよいよ出掛けることになりました。

山道は歩く方が面白いといふので、車は途中の茶屋で待たして置いて、お花さんも母様達と一緒に、草履ばきになつて歩き出しま

した。

まだ高雄へは大分遠いのですが、京都のことですから、一寸した丘の上とか藪のかげとかに、紅葉が赤くかたまつて居るところが澤山あります。

『彼處もう高雄ですか。』

と何度伯母さんに尋ねたか知れません、そして信玄袋を見ては、早く紅葉を入れたいと思うて居ました。

『もう大分道が深山のやうになつてきましたね。』

と伯母さんが仰しやいました。

『さうですね、私はかう云ふ道が好きですよ、何だか命がのびるやうに思ひましてね。』

母様がかう云つてお出でになります。

『茶屋があるが一寸休んで行きませう。』

大きな木のかげに出した床几へ皆は腰を掛けました。頭の上へ栗や蜜柑をのせて歸つて來た其處の女主人は、それを箱から出して盆に入れて持つて來ました。茶は大きい茶瓶を木の枝に吊つたのを下して、湯呑についでくれました。お花さんはおいしいお茶をのみながら、其處らを眺めて居ますと、すぐ目の前に、もとは赤いいい色であつたらしいが、今は何だか大層つかれた樣に見える紅葉の葉が二人立つて居ました。

『おや、紅葉さん。』

『はい。』

『御病氣でもなすつたの。』

『いいえ、まあお孃樣お聞き下さい。私ら二人は昨日まで高雄の地藏院の庭に居たのでした。その頃は綺麗な紅葉だといつて、どんなに皆に賞められたでせう。それが昨日のお晝頃、私ら二人が木から下りて來ました時、丁度此處のお内儀さんが籠を持つて山へ好い色の紅葉を捜しに來て居たので、二人は早速その籠に中へ入れられて、連れてかへられました。さうしますとお孃樣御覽遊ばせ、彼處に白い手拭に紅葉を染めぬいたのがあるでせう、あれは私ら二人のからだをあの切にはさみまして、横づちで上からたたきつけて染めたのです。もう用がないからと捨てられましたので、どうしようかと二人で相談をして居る所

なのです。』

『まあお氣の毒な紅葉さんですこと、それではあなたがたがお厭でなければ、私の信玄袋の中へ入つていらつしやいな、私は東京へ歸つてからも、貴女方を太切にしますわ。』

御親切に有難うございます。けれどお嬢樣、私らはもうかういふ風になつたのでございますから、お供してまゐるのが羞かしうございます。皆樣が御覽になつて、お嬢樣までがお笑はれになつては濟みません。』

『さうですよ、お嬢樣は御親切に仰しやつて下さるのですが。』

と、もう一人の紅葉も云ひました。

『そんなことはありませんよ、大丈夫ですよ。』

『それはもう、參りたいことは參りたいのですけれど。』

その時、母樣が、

『お花さんや、此の手拭が綺麗ですから、一つ買つて上げませう。』

と云つて、お花さんの傍へ持つて來て下さいました。

『母樣、ありがたう。』

とお花さんはお禮を云つて、また紅葉の方を向いて、

『ねえ紅葉さん、この手拭の好い色の紅葉は貴女方が染めたのでせう。これを持つて居ると、何時までも貴女方の綺麗であつたことを人に話しが出來ますわ。だからいいではありませんか、御一緒にいらつしやいな。』

と、熱心にお花さんがすすめるものですから、二人の紅葉はたうとうお花さんの信玄袋の中へ入りました。それからまた皆は出掛けましたが、ほどなく美くしい繪のやうな高雄の山のふもとへ出ました。美くしい紅葉の子は彼方此方へ飛びまはつて遊んでゐます。そこの清瀧川には朱でぬつた橋がかかつて居ます。その傍でお花さんが、

『紅葉さん、紅葉さん、私と一緒に東京へ行く紅葉さんはありませんか。』

と云ひますと、一人の紅葉が、

『私まゐりたいのですが、只今は一寸お友達と一緒に水の上へ泳ぎに行きますから、お嬢様のお歸りの時を岩の上で待つてます。

せう。』

『さうですか、それでは歸りに此處へ來ますよ。』

と、お花さんはまた山を上へ上へと上りまして、日本第一紅葉の絶景と石に書いた所まで行きました。はるか下を見ますと、清瀧川が絹絲のやうに白く和らかくうねつて居まして、その上に紅や朱や樺や黄の紅葉が、數知れず立つて居る景色を見て、お花さんは眞實に石に書いた通りだと思ひました。其處でまたお花さんは、

『私と一緒に東京へ行く紅葉さんはありませんか。』

と云ひました。すると今度は百人程の紅葉の子がうなづきあつて、一度にお花さんの傍へ來ました。

『お嬢様、私まゐります。』

『私もつれて行つて下さい。』

『東京へまゐります、まゐります』

と口口に云ひます。

『まあ、皆様來て下さるの。』

とお花さんは、信玄袋を出して、集まつた紅葉を、殘らず入れようとしますと、また上から、

『一寸待つて下さい。』

などと云つて、急いで信玄袋へ飛び込むのもありました。歸り道にはまた約束した紅葉の子が、

『お嬢様をお待ちしてました。』

と云つてにこにこ笑つてお花さんを迎へました。それから栂の尾

でも亦新らしい紅葉の子を信玄袋へ澤山入れたさうです。

芳子の蟲齒

芳子さんはお菓子好きの子供で、ときどき蟲齒がおこりました。蟲齒は奥に一本あるだけですけれど、隨分度度痛むことがございました。

『母さん痛いよお。眞實に痛いよお。』

芳子さんは、疊に顔をすりつけて、大きい聲で云つて居ます。

『さう云つても仕方がないからね、お醫者様にお藥をつけていただいたのだから、じつと辛抱していらつしやい、すぐなほりますからね。』

と母さんはおつしやいました。

『でも母さん、私じつとして居られないことよ、痛いんですもの、痛いよお、母さん、痛くつてよお、母さん、母さんてば。』

『それでは氷を嚢に入れてつけて上げませう。』

と母さんは仰しやつて、氷嚢を芳子さんの頰の上に當てて下さいました。

『冷たい、冷たあい、冷たあい。』

『氷ですもの。』

『痛くつて、冷たくつて、私辛抱が出來ないわ、苦しいわ、母さん、あああ。』

芳子さんは大さい聲で泣き出しました。

『芳子さんは好い子だからね、母さんのお膝の上へ顏を置いてね、氷で冷すとね、すぐに痛いのがなほるのですよ。』

『厭だわ、厭だわ、母さん痛いわ、姉さん來て下さいよお。』

かういつて芳子さんは座敷中をあばれまはるのです。それでも母さんは優しく、

『それではね、芳子さん、姉さんを呼んで來ますから、氷嚢を當ててお貰ひなさいな、ね。』

といつて、姉さんの花子さんを呼んでおいでになりました。

『芳子さん、痛いの。』

『痛いのよ、私死にさうよ、姉さんどうかして下さいな、痛いわ、あああ。』

『泣かないでいらつしやい、氷嚢をつけて上げるから。』

『氷嚢いやよ、この歯をとつて頂戴な、私たまらないことよ、やう姉さん、歯をとつて下さいよお。』

無理なことを云ふものですから、花子さんも困つてしまひました。

『じつとしてゐるのが好いのですよ、私も歯の痛い時はね、母さんの仰しやる通り靜かにして居ましたの、さうしたらすぐなほつたのよ。』

さういつても、芳子さんは、

『靜かになんか私して居られないわ、痛いわ、痛いわ、とつて頂戴よ、痛い歯を抜いて下さいよ姉さん。』

『氣を靜めなさい、ね、芳子さん。』

『厭だわ、厭だわ、痛いわ、痛いわ、兄さん來て下さいよお。』

御本を讀んでいらしつた兄さんも出ていらつしやいました。

『どうしたの、芳子。』

『私死にさうよ、歯が痛くて、痛いよお。』

『馬鹿なことを云つてはいけない。歯痛で人が死ぬものですか、

そんなことを云はないで、氣をおちつけて、花子さんに氷で冷してお貰ひなさい。』

といつて兄さんは直ぐ行つておしまひになりました。

『あら、行つちやつたわ、私がこんなに痛がつて居るのに、眞實にひどい兄樣だわ、お父樣、お父樣來て下さい、お父樣。』

お父樣も、可愛い芳子さんが泣聲で呼ふものですから、お髭を撫でながら書齋から出てお出でになりました。

『芳子、齒が痛むか。』

『痛いのよお、お父樣、あああ。』

と泣きました。

『あまりお菓子を澤山食べるからだ。』

『痛いよお、痛いよお。』

『仕方がない、靜かにして居なさい。』

お父樣も彼方へ行つておしまひになりました。かうなると芳子さんはやはり母さんに來てほしいのです。

『母さん、母さん。』

『どうしたの。』

『母さん、母さん、來て下さいな。』

母さんはまた來て下さいました。

『母さん、私靜かにしますことよ。』

『すこしはよくなつたの。』

『よくないのですけれど、辛抱してじつとして居る方が、痛くな

いやうですもの。』

『さうです、芳子さんはわかつたのねえ。』

『よくわかつたのよ、私もうどんなに痛くつてもあばれたりなんかしないことよ、だから母さん此處に居て下さいな。』

芳子さんは、眞實に自分が悪いと思つたものですから、かういひました。

『それではね、母さんのお膝へ枕して、じつとして、神樣、神樣、どうぞなほして下さいと、おいのりして居なさい、さうすると直ぐなほつて來ますから。』

『さうしますわ、私なんでも母樣の仰しやる通りにしますわ。』

芳子さんは、母樣のお膝へ寢させていただいて、氷で冷して貰ひ

ました。

暫くすると、芳子さんはすやすやと寢てしまひました。すると、一寸ほどの小い人が金でこしらへた鶴嘴のやうなものをもつて來ました。

『あなた、どなた。』

と芳子さんはいひました。するとその小い人は、

『私らはね、神樣のおいひつけで、貴女の齒の悪いところをなほしに來たの。』

と優しい聲でいひました。

『それでは、もう痛くなくなるの。』

『さうです。』

『まあ、うれしいこと。』

『暫くの間、私たちがこつこつと音をさすのを辛抱しておいでなさい。』

『辛抱しますとも。』

二人の小い人は、こつこつと音をさせて、芳子しんの齒のわるいところをとつてしまひました。

これは芳子さんの夢でしたが、目をさました時には、もう齒痛はすつかりなほつて居ました。

伯母さんの襟巻

本郷の伯母さんがお出でになつたと、女中がいつて來たものです

から、太郎とお花は大よろこびで玄關へ走つて出て來ました。さうすると、もう伯母さんは二階のお座敷へお通りになつた後で、玄關の間には伯母さんの吾妻コオトと襟巻とが置いてありました。

『つまらないなあ、伯母さんはもう二階へ行つちやつたのだ。』

『あら太郎さん、伯母さんの襟巻は狐ですわ。』

と、お花さんがいひました。

『面白いなあ、伯母さんは狐を首へ巻いて歩いて居るのだ。』

『眞實の狐ぢやないわ、皮だわ。さあ太郎さん、二階へ御挨拶に行きませう。』

『僕はあとから行きますよ、姉さん先に行つて下さい。』

お花さんが二階へ行きました後で、いたづらものの太郎さんは、

そつと自分のお部屋に行きまして、前橋の伯父さんから戴いた狐が、箱の中に寢て居るのを、そつと出して玄關へ持つて來ました。太郎さんは伯母さんの襟卷を机の下へ入れて置きまして、眞實の狐を吾妻コオトの傍へ置いておきました。

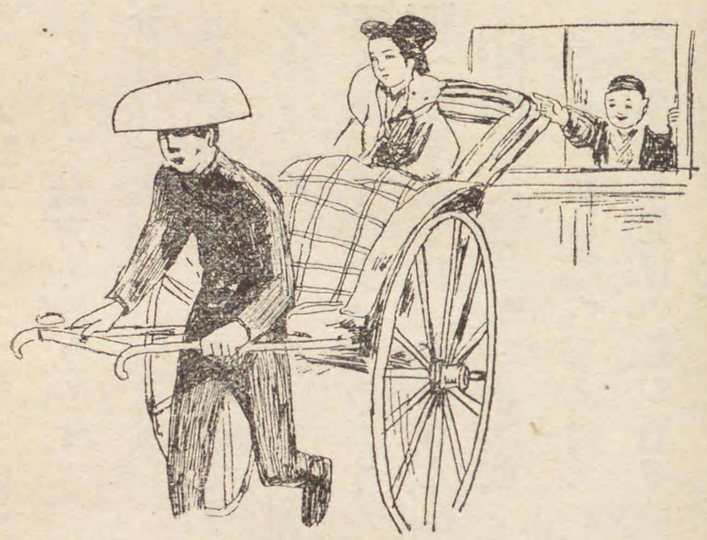
『それではまたゆつくりと來ませう。』

といふ聲がして、伯母さんはもう梯子段を下りて來ましたから、太郎さんは襖のかげへ隱れました。

『この頃は寒いものですから、こんなものを卷いて歩くのですよ、これは狐ですよ。』

『隨分重さうですね。』

と母さんは伯母さんにいつてます。



『重いのですよ、おや、今日はまた特別に重いやうですわ。』

『何だか足があるやうですね。』

『尾なんですよ、尾だけが付いて居るのです。さよなら、太郎さんによろしく。』

伯母さんはまた車に乘つてお家へ歸りました。それから暫くして、伯母さんの家の女中の竹が、伯母さんのお部屋へ行きますと、

『ぐう、ぐう、ぐう。』

といふ聲がするのです。何でも簞笥の置いてある方から聞えると思つて、其方を向きますと、大きな狐が簞笥の上でよく寢て居ます。

『あら厭なこと、誰か來て下さい。』

『ぐう、ぐう、ぐう。』

誰も來てくれないものですから、お竹は急いで其處を出て、茶の間へ參りました。伯母さんは茶の間に居たのです。

『奥樣、大變でございます。狐が簞笥の上に居ります。』

『何をお前は言つてるのだね、あれは私の襟卷ぢやないか。』

『それでも眞實の狐が居るのでございますよ。』

『狐は狐でも襟卷の狐なんだよ。』

『足も耳もあつたやうでございますよ。』

『あれは尾なんだよ。』

『ぐう、ぐうといびきをかいて居つたやうでございますよ。』

『それはお前の神經なんだよ。』

竹は不思議でならないものですから、後でもう一度よく見に行かうと思つて居ました。

そのうちに伯母さんはまた御用があつて、神田の松井さんといふお家へ行きました。松井さんの家の女中は、お客樣の持物を片付けやうと思ひまして、玄關へ來ますと、狐が、

『ぐう、ぐう、ぐう。』

といつて寢て居るものですから、驚いてしまひました。